

888
✓
2A

傳 說

外 霞 滄

井 荒

希 臘 神 話

大 學 發 兌 館

はしがき。

神話は畢竟この世界を精察に考察する暇もなく又自からこれを科學的に研究し得る程の智識もない原始の人民が創め出した世界の解釋である。この不可思議な宇宙に於ける土地や海や空や人生やの詩的説明である。晝や夜や日や月明星や風や雲や火に生命を賦してこれを世界の神秘な演劇の役者に見立てたものである。希臘や羅馬や印度やその他古代の人民はこの世界を一大争闘の舞臺と見て神々や悪魔や勇士が無上權を争ふ幕が開いてるのだと思つた。

印度や支那や本邦に於て佛教が文學や美術の思想に感化を興へたやうに神話が西洋の文學や美術の構成に尠からぬ影響を及ぼしたのである。されば西洋の文學や美術を明亮に解せんとならば先づ神話を緝かねばならぬこととなる。希臘の文學や美術が典雅である莊重である優美である華麗であると世にもて囃さ

れ古代に於ける他の國國より抽でて圓滿な發達を遂ぐるまでには神話といふ要素があつたことを忘れてはならぬのである。

想像力の生き生きとした青年諸君は物語として神話の興味を感ずると同時に文學や技藝の方面に其生き生きとした想像力を應用せらるるであらう——想像の力が世界を支配すると奈翁も言つた。世事に閱歷ある大人諸君は常に趣味の深い傳説として神話を讀み去るのみならずその中に多方面の精神的眞理を含んでゐることに眼を着けらるるであらう。

此書は西洋の文學や美術の淵源たり精華たる神話の世界的好評あるものを蒐めて燦然章を成し古傳説の全領を叙して遺憾なきリリアン、スタフトン、ハイド著好評希臘神話を本に翻譯し別にハウソン著ソングデアインツクヤ同著タングルウツド、テールスヤキングスレ——著希臘勇士を參照して成つたのである。

譯者しるす。

小引

(一) 希臘神話

今から幾千年とも分らぬ前にアーンヤンといふ人種が住んでゐた。この人種の眼には宇宙の森羅萬象が皆生々活躍して見えたのである。蒼穹を仰いで白雲の動いてゐるのを觀ては海上に船の白帆を揚げて走つてゐるのが見えると想つた。又若し雲が一方に簇り風に追はれて速く動けば目に見えぬ牧者に牝牛が追はれるのが見えると信じた。黒雲を見ては法外に大きな鳥の群が各嘴に蟲を銜へて大空を翔るのだと思つた。電はこの鳥が折々その蟲を落すのだといつた。又電は雲の海を射るが如くに突つ切る魚だといひ或は槍だといひ或は蛇だといふものもあつた。暴風大雨を催す雲は龍だといつた。

この人種は好んで空を眺めて倦むことを知らなかつた。折には雲を寶の山と稱へて電を岩の間隙から内部の燦爛たる寶の閃きをチラと漏すのだといつた。晝の晴天

は人であると思つてその人にフアーザア、ダイエーアス(父の天空の義といふ名を與へ天空は奈何にも高くして他に及ぶものがないのでフアーザア、ダイエーアスが萬物を支配するのだと言つてゐた。又太陽は光輝を放つ遍歴者だと云つた金眼金手の神だといつた。夜の暗闇は日の神の矢で殺された蛇だといつた。

このアーヤン人種の幾部屬もが他の國土に移住する時が來た。その幾分は吾々が今希臘といつてゐる國土に落ち附いた。空や雲の話もフアーザア、ダイエーアスの話も雲の家畜の牧者の話も金眼の日の神の話も皆この折既に傳へ來つたのである。希臘にては斯んな話が幾千年となく代々口碑に傳つた。して斯の話を語り次いだ者は一語一語皆眞であると信じて聞いた儘を正確に語り次がうと苦心したが尙時につれその話に幾分の變遷があるのを免かれなかつた。

希臘に移つたアーヤン族が長い間その國土に住んだ後フアーザア、ダイエーアスの青空であるといふのを忘れた。フアーザア、ダイエーアスの古名を稱へずにフアーザ

アジエースと云つた。フアーザア、ジエースは神々と人々との王たり父たるの義である。後に羅馬人といつた他のアーヤン族はフアーザア、ダイエーアスの事をジエービターと稱へた。雲の家畜を追ふ牧者が風であるといふことも同様に忘れてこは眞の人が神かであると思つたので彼をハアーミーズ又はマアーキエリーといつた。斯んな風で古代の希臘人即ち希臘に落ち附いたアーヤン族の子孫が多神を信仰するや身になつた。無論こは希臘人が眞の神について何も知らない長い長い前の事であつた。

時代の進むに隨つて希臘の數ある小國が斯の古い話即ち神話について各々の解説に特色をもつこととなつた。神話は日夕一家團圓の間に幾度となく繰返し話されたものであつた。王宮にても神話が琴の音に合せて歌はれることが屢であつた。比較的近代になつて詩人の手に成つた神話の書物も遺つてゐて今尙讀み得られるのである。

古代希臘の神話に據るとジュピターは神々と人々との王たり父たるものであつた。オリムパス山の嶺高く雲の上に他の神々と共に御坐して群神に打ち勝れた威力を保ち給ふたのである。雷霆はこの神の武器であつた。希臘人は電光を槍や矢のやうな形に出来た一種の魔石だと思ひそをジュピターが神の敵や悪事をする人間に投げつけ給ふのだと信じた。雷雨を好む鷲はジュピターの神鳥であつて雷霆を爪先に扱つたものと思つた。

ネプチューンとプリュートはジュピターの兄弟であつた。ネプチューンは海を支配しプリュートは冥府の王であつた冥府は亡者の往くものとなつてゐる暗い陰氣な所である。ジュノーはジュピターの妃であつたので女神等の中で一番威權があつた。

ミナーバは智慧の女神であつた正義に味方する軍の女神であつた技藝の女神であつた橄欖の樹を希臘人に授けたのも糸を紡ぎ機を織るのを希臘婦人に教へたのも

(希臘神話)

の女神であつた。又女神は勇士の保護者であり恩人であつた。

(希臘神話)

アポロは豫言の神であつた音楽の神であつた詩歌の神であつた。後には又日の神であつた特に太陽から出る光線の神であつた。但し日の本體の神はヒーリオスであつた。折々黒雲を横切つて見えることのある金色の光線はアポロの黄金の矢であつた。

ダイアナはアポロと雙子の妹であつた。アポロが日光の神であつたやうにダイアナは月光の女神であつた。但し月の本體の女神はシーリーネであつた。ダイアナは弓と銀の矢を挿した箠を負ふて山々の間を彷徨く女性の獵師であつた。女神の銀の矢はアポロの金の矢のやうに折々悪人を罰するに使はれた。女神は新月形の冠を戴いてゐた。して寵愛の生物は鹿であつた。

ヴキーナスは愛と美の女神であつた。海の泡から生れてあらゆる女神の中で一番美しいのであつた。女神の他行する折には鳩の群がその車を挽き雀の群に取り巻か

れてゐた。

マアーズは悪い意味の軍神であつて、戦や流血そのものを好んだ。

マアキユリーは神々の傳令を勤め、快速の脚をもつた使者であつた。牧者や旅人の保護者であつた翼のついた帽を被り、翼のある鞋を穿き、役目の標章として頂に二ツの翼があり、その周圍に二ツの金野の絡んだ黄金の棒を持ち歩いた。この棒を章の杖と稱へた。

シーリーズは地面に生育するあらゆる物の女神であつて、グレート、マアーズア（大母の義）と云はれてゐた。

以上挙げたる神々の外にオリムパス山の雲の上には住まずに地上の幽静な所に家居した第二流の神々もあつた。斯んな神々は山の女神水の女神林の女神野の女神半人半山羊の農牧の神、半人半羊の神、人首魚身の海神などであつた。山水林野の女神等は殆んど到る所に居て常に牧場や森や山にその姿を現はし、どの泉や水源の底に

(希臘神話)

(希臘神話)

も必ず水の女神があるのであつた。農牧の神パンには小さな角や尖つた耳や山羊のやうな脚があつた。半人半羊の神は葡萄樹の神のバツカスの従者で羊のやうに兩耳が尖つてゐて、頭髪の間から小さな角が出てゐる外は人間の姿と餘り違はなかつた。人首魚身の神は海に住んでゐて介殼の喇叭を吹き立てて荒波を打ち鎮めた。

此の時分には世に寂寥の場所とはなく、沙漠にすら巨人族と侏儒族とがゐた。古い神話に云ひ傳へたその時代はさても不可思議なものであつた。

目次

○「苦勞」の惡魔と「希望」の神……………一頁

○大洪水……………八

○アポロ神とダフネ女神……………一三

○アポロ神鼈甲の琴を得たること……………一六

○マアキユリー神と百眼の番人アアガス……………二〇

○シーリーズ女神とその娘のプロサーバイン……………二四

 その一 シーリーズ女神の愁歎……………二四

×○日の神の子フェーイソン……………二五

×○川の女神クライチー……………二五

○七人の姉妹神……………二六

○美少年エンデミオンの睡眠……………五〇

○フェニシヤの太子カドマス一都城を興したる由來……………五〇

 その一 太子の妹イコロバの失墜……………五〇

 その二 カドマスと龍……………五六

○バアシユウス……………六〇

 その一 バアシユウスとミーシエーサ……………六〇

 その二 バアシエースと乙女アンドロメダ……………七〇

 その三 バアシエースの歸郷……………八〇

○紡織の妙手アラクネ嬢……………八三

○シエーソンと黄金の羊毛……………八九

 その一 片足に履を穿いた人……………八九

 その二 金羊毛探検隊の航海……………九六

(希臘神話)

○美貌の扈従ハイラス……………一〇九

 その三 金羊毛を手に入れる……………一〇一

○姉妹の王女ブロクネとフイロミーラ……………一一三

○勇士ベレロフラン……………一二七

○タイソナーナスと女神エーローラ……………一二四

○コーメータスと蜜蜂……………一二六

○美少年アドーニス……………一二九

○マイダス王……………一三一

 その一 マイダス王の黄金の感應力……………一三一

 その二 マイダス王の耳が驢馬の耳になつた由來……………一三六

○王と櫛の木……………一四〇

○シエーノ女神とバルサイオニー……………一四六

(希臘神話)

◎ハークリーズ……………140

その一 捕獲の中にあるハークリーズ……………140

その二 ハークリーズの青年時代……………141

その三 第一回の勞役 ニーミーア谷の獅子を殺す……………147

その四 第二回の勞役 ラアーニーアンハイドラ(九頭一體の水蛇)を殺す……………150

その五 第三回の勞役 エリマンサス山の野猪を生擒る……………152

その六 第四回の勞役 月光の女神ダイアオの鹿を生擒る……………155

その七 第五回の勞役 スナムフェーリア谷の群鳥を果絶する……………156

その八 第六回の勞役 エーツアス王の音舎を掃除する……………159

その九 第七回の勞役 クリート王の牡牛を生擒る……………159

その十 第八回の勞役 ダイオミテス王の馬を生擒る……………161

その十一 第九回の勞役 女王ヒツボリテアの帯を手に入る……………164

(希臘神話)

◎シーシユース……………195

その一 シーシユースの雅典に來た由來……………195

その二 牛頭人體の怪物ミノータアーを殺す……………198

◎フキリーモンとベシス……………211

◎音樂の妙手オアフユースと谷の女神ユーリデシー……………217

◎美少年ガニミード……………223

◎風の袋……………229

◎女魔術者サアシー……………236

(希臘神話)



第一圖
アマキエリ—女神美女パードンラを携へエヒミヤスエの居を訪はんとす

(希臘神話)

その一	紫の啄木鳥	二六
その二	サアシーの宮殿を訪へるユーリツシース王	二七
○アリオントと海豚		二八
○サイキー		二九
その一	愛の神イーロスの宮殿	三〇
その二	サイキーの審判	三一
○オーデンと智慧の泉		三二
○グラッドシヤム宮と紀念の城門		三三
○雷神の槌の詮索		三四



圖 二 第
リよ界下ンイバアサロブ神女處
す來歸に許のズーリシ神母てれは伴に神ーリニキアマ

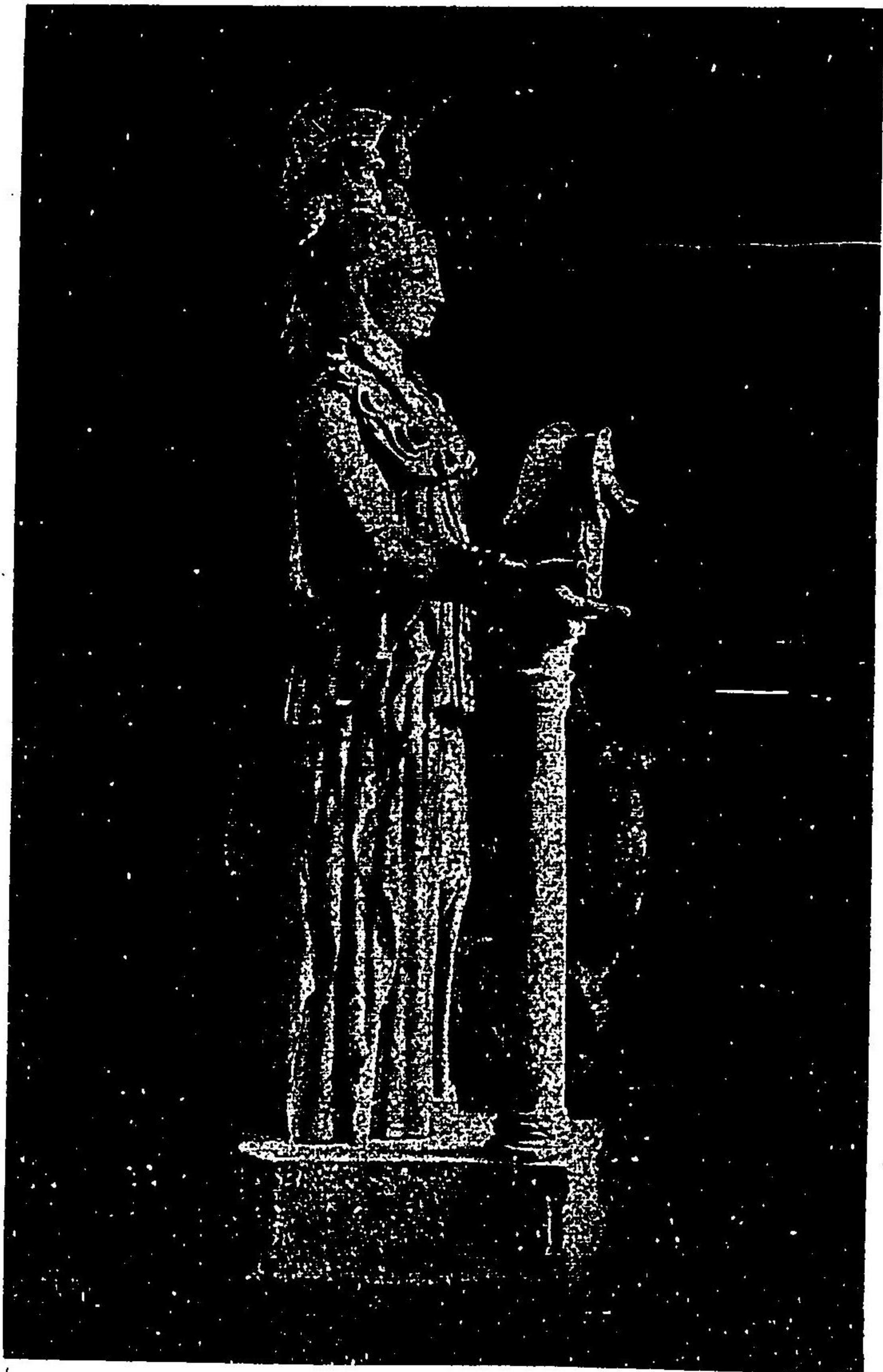


圖 三 第
バーアナミ神女の慮智、事軍、術藝



圖 四 第
スーユシアマをと蕤窟と胃と履のき附翼等神女處の園橋林金黃
すし渡手に

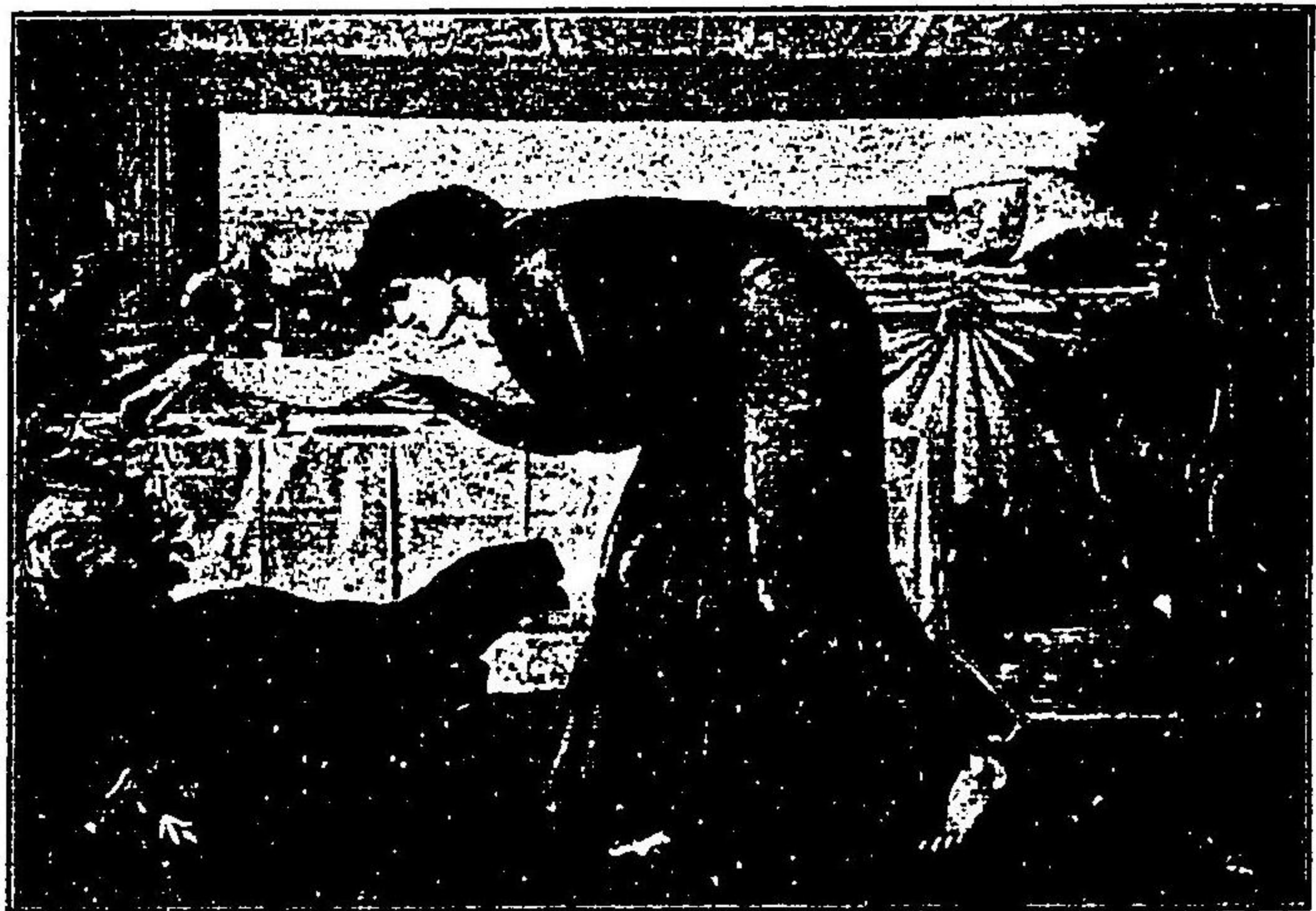


第 五 圖
ハクアリズル水の蛇を退治す



第六圖

豹軍に打ち乗るれカツス神、舞樂せ處る女神に等追隨せ
ならが女王アリマの物語の聴いての悲運を憐み
九曜の冠を授く



第七圖

女魔術者アシー魔剋を調合す

傳 說 希 臘 神 話

荒 井 霞 外 譯

◎「苦勞」の「惡魔」と「希望」の神

今より長い長い前に黄金の世といふのがあつて誰も皆善人であつた幸福であつた
 時候はいつも春であつて土地には一面に花が咲いてゐた風は吹いても花を躍らす平
 和の風のみが吹いてゐた。誰れもこれといふ仕事は何もないのであつた。人々は山
 の麓に生えてゐていつでも摘み取れる草莓の實や野葡萄や櫛の林に澤山生つてゐる
 甘い橡實などを食べて生きてゐた。川には乳汁だの天酒といつて蜜の様に甘い
 飲料が流れてゐた。蜂ですら蜜を蓄へないでもよいのである。蜜は樹からほと〜

と落ちてゐた。到るところ物が豊かであつたのである。

廣い世界に一振の劍もなかつた人々の圍ひ合ふ武器といふものは皆無であつた。誰れと噂に聞いたことすらなかつた。鐵や黄金は深く地下に埋もれてゐたのである。

又誰れ一人病氣に罹つたことがなかつた。心配といふことが一切なかつた。老年になつてといふこともなかつた。

茲にプロミーシユースといふのとエビミシユースといふのと二人の兄弟が斯んな不思議の世に住んでゐた。此の時分には人間はうす暗い鬱陶しい穴の中に住んでゐたが、プロミーシユースは穴住居よりは頗る安樂な家を造ることを人間に教へた。これは人間にとりて長足の進歩であつた。

森の中にある獸や巖の上に巢を造つてゐる大きな鳥は強かつたが人間は弱かつた。獅子には鋭い爪や齒があつた。鷲には翼があつた。龜には固い甲があつた。だが人

(希臘神話)

(希臘神話)

間は仰きに見直に立つてはゐるが身を防ぐ武器がなかつた。

プロミーシユースは何んでも人間はあの通り赫々と空に輝いてゐる。シユーピター神の不思議な火の花を我が物とせなければならぬと思つた。そこでプロミーシユースは中空の蘆を携へてオリンパス山——希臘の神々の御座所——に登つていつて赤い火の花を盗んで蘆の中に入れて持ち歸つて來た。

これより他の生物は皆人間を恐がつた。この赤い花が他の生物よりは人間の方を強くしたからである。人間は鐵を地の中から掘り出して新來の火を使つて獅子の齒よりも鋭い武器を造つた。火で威して牛馬を馴らし、靱に繋いで地を耕すことを仕込んだ。

シユーピター神は御座の上より人間の追々と強くなつて來たのを御覽になつて大に驚き給ふた。一日シユーピター神は吾が赫赫した赤い花を盗んだものゝあることに氣付き給ひ盗んだものはプロミーシユースであることを悟り給ふたので酷う不

機嫌であつた。

プローミーシユースは人間一般の爲めとて火を盗んだ上はシユーピター神の御立腹あるは必定だと思つたので遠方へ旅立ちして一時逃げやうと決心した。だが去るに臨みて弟のエビミーシユースに神々から贈物があつても一切受けてはならぬぞと戒めた。

プローミーシユースが去つた後暫くあつて一日のことマアキエリー神（シユーピター神の子息で神々の使者となり通辨をつとむ）がバンドーラ（世界最初の婦人）といつた美しい乙女を連れてエビミーシユースの寓居を訪問ふた。バンドーラは蕾の薔薇の花環を頭に戴き頭の廻りには細い黄金の鎖を幾筋となく軽く捲きつけてゐた、そして蛛網のやうな覆面はやがて長襦袢の襟もとまで垂れてゐた。マアキエリー神はバンドーラをエビミーシユースに紹介して獨棲の徒然を慰めんとて神々よりこの賜物を贈られたのであるといつた。

（希臘神話）

（希臘神話）

バンドーラの花の顔には言ひしらの愛嬌があつて、エビミーシユースは神々の好意を贈つて呉れたものより外は思はなかつた。それでエビミーシユースはプローミーシユースの戒には頓着しないでバンドーラを我が寓居に引き入れて同様してゐると日のたつのが頗る速くて楽しいのを覺えた。

間もなく神々より他の贈物をエビミーシユースに贈られた。これは一つの重い箱であつて蓋を開けてはならぬとの條件つきで半人半羊の神が使者となりて、エビミーシユースの寓居に持つて來たのである。エビミーシユースはこれを受けて寓居の片隅に立てらかして置いた。今となつては神々よりの贈物を受けてはならぬといふプローミーシユースの戒は全然不必要だとエビミーシユースは思つたからである。

エビミーシユースは終日家を出て獸を獵したり魚を漁つたり川の岸に生えてゐる野葡萄を摘み採つたりすることが度々であつたが斯んな日にはバンドーラは唯この

不思議な箱の中には何が通入つてゐるのだからふかと訝る外には何も所在がなかつたのである。一日のことバンドーラの好奇心は抑へきれなくなつて少しばかり蓋を持ち上げて覗き込んだところが宛然蜂の巢の蓋を挙げたと同様であつて小さな羽翼のある生物の群が飛び出して来てバンドーラの周章ふためいて居る間に既う刺されてゐたので蓋を下して泣きながら駆け出した。エビミーシユースは丁度玄關口に這入つて来たところをこれも亦酷く刺された。

バンドーラが箱から出した小さな羽翼のある生物は「苦勞」といふ悪魔で初めてこの世の中に現はれたのであつて忽ち四方へ飛び散りて到るところに傳播り機會があれば人を苦め、人を痛めてゐた。

是より人々初めて頭痛やリウマチスやその他の病氣といふものを知つて來ることになつた。して彼の「苦勞」が箱から出ないうちにはいつもお互に深切に愉快に暮したものが今は却つて不深切にもなり不和にもなつた又人々は年老もることにもなつて

(希臘神話)

來た。

又いつも春の時候であつたことも既う出来なくなつた丘の麓を一面に被ふてゐた新鮮やかな若草もエビミーシユースとバンドーラに大層愉快を興へてゐた派手やかな色どりの花も熱い夏の日光に焦され秋の霜に打たれることになつた。斯んな「苦勞」の悪魔が出しやばることになつて了つたのは世のため人のためさてく悲しいことである。

「苦勞」の悪魔は皆箱の中から逃げて了つたがバンドーラが周章して蓋をした折に一つの小さな羽翼のある生物をその中に閉ぢ込めたこの生物が「希望」といつた善神である。この希望の善神はバンドーラを得心させて箱を出て自由の身となつたと思ふ間に廣く世の中を飛翔つて「苦勞」の悪魔が仕業の殃災を取除けておました只一つの善神の手であんな悪魔の群が仕業の殃災を掃ひ除けんと焦心つてゐた。人間に何か不吉の事でも起つたなら「希望」の神はいつも何とか慰藉の工夫を遣らした「希望」

(希臘神話)

は人の頭痛に惱めるを見ては薄絹のやうな羽翼で静に扇いで爽冷しい風を吹き送つてゐた。蒼白い頬のものを見てはその頬に紅の色をさし込んでゐた。取り分け嘉すべきは老ひゆく人々の耳におん身等はいつか又紅顔の少年となるの日來らんと囁いてゐた。斯んなにして『苦勞』の悪魔は此の世に出て來たのである。だがこれと同時に『希望』の神も現はれたといふことを忘れてはならぬのである。

◎大洪水

黄金時代の後には人々互に争闘する世となつた。それより神々の指圖で炎熱の夏や互寒の冬をこの世に差送らるゝこととなつた人々は銘々自分の住居を穴や洞の中に造ることとなつた。その穴や洞に住まつて夏には熱い日光を避け冬には寒い風を避いたのである。人々は土地を耕し穀物を蒔きその收穫を冬季の食料にと蓄へた。世が澆季になりゆくにつれて人々はいよいよ争闘を好むやうになつて來て遂には

(希臘神話)

(希臘神話)

長い長い間地の下に埋れてゐた黄金を掘り出し又鐵をも掘り出した。人々は新に見出したこの燦爛した光輝を放つ山吹色の金を我が手に入れんものと前にも増して酷く争闘をした。取分け悪いことにはこの鐵で鋭い刃物やその外の武器を造つて互に烈しく闘ひ合ふこととなつた。これより後は強盗や殺人やその外多くの罪を犯すことが世の常の事のやうになり物事いよいよ悪しくなつて來て人の生命は何所にいつても安全でないほどになつて了つた。結局はこの廣い世界の中で相變らず神々に供物を捧げてゐたものはプロミーシユスの息のジュケーリオントその妻のピツラアより外にはなかつたがこの二人は黄金時代に住んでゐた人々のやうに善良であつた。温厚であつた。

神々の父なるジュピター神はオリムプス山より見下しながら世の人々が悪しくなつたのを認めて人類を滅絶して了はうと御心を定め給ふた。そこでジュピター神は『北風』を風の神イーオーラスの洞穴に閉ち込めて『南風』を遣はし給へり『南風』は雨

を起す風であつたからである。雲は満天を蔽ひて大粒の雨が降り出した初の程は緩やかであつたが次第に急になつて来た。畑の穀類はみんな僵れて了ふまで雨が降つたが雲はなかなか薄らかなかつた雨も降り止まなかつた。河々の水は岸に溢れて原野に横流し大木を漂はした。海や河は陸上に氾濫り海豚が森の樹の枝の間に遊んでゐるほどであつた。海の女神たちが樺の大木の間から覗いてゐるのが見えた。雨はなかなか止みそうにもない。水嵩はいよいよ高まつて来たのであつた。

人や鳥獸は這々の體で丘の上に逃げた。狼や獅子や虎は羊や牛と同じ憂き目に遭つて相並んで遊いでゐたのであつた。初めは丘の上に逃げ次いで山の上に逃げたが水は次第に進ひ上つて来て中で高い山の絶頂の外は一面水に浸されて見えなくなつて了つた。

遂に雨が止み雲が僅に跡切れたときに中で一番高い山であつたパアナツサス山の絶頂ばかりが水の上に頭を出してゐたジューケーリオンとピツラアは小舟に航て洪

水の中を二人で操つてゐた二人のものはパアナツサス山の絶頂が尙水の上に出てゐるのを認めたのでそれへ舟を繋いで神々に供物を捧げた。

さて前にも申した通りジューケーリオンとピツラアは他の人類のやうに悪いものにならなかつたのである。ジューピター神が唯この二人のみ生き残つてゐるのを認め給ふたときに「北風」を遣されて雲を吹き掃はしめ給ふた。次に海の神ネプチューンは人首魚身の喇叭手に命じて長い扭つた形の喇叭を吹かせたところが海はその音を聞いて元の水面に復舊つた。水が急速に退いたので土地が再び現はれたがさて如何なる變化が起つただらう何物も皆黄色い泥の黯澹い外被をかぶさつてゐた。そして天地はひそつりとして生物の音は打ち絶えて了つた。ジューケーリオンとピツラアは斯んなにひつそりした沈静よりは口論の聲なりと聞えた方が勝だと思つた位であつた。

近邊の燈火は皆消えて神の宮殿の泥に塗れたのがあつたがジューケーリオンとピ

ツタアはその玄關口の目慣れて入り易げなるに懐かしき心地がしたので這入つていつて淡暗い陰の所に座つて斯んな廣い世界にたつた二人で居て前途如何成行くものだらうと訝つてゐた。その時不思議の聲あつて「汝等が大きな母の骨を汝等の背後に投げよ」と二人のものに告げた。その聲は好意の聲のやうに聞えたがシューケーリオンにもピツタアにも「汝等が大きな母の骨」といふことが何んのことやらさつぱり分らんかつた。暫くは思ひ惑つた上にて「大きな母」とは大地のことであらう。「骨」とはそこらにある石のことであらうと判断した。それで宮殿の方へ顔を向けて立ちながら二人のものは數個の石を取つておのが背後に投げた。二人は如何なる事の起つたかと振り返つて見ればその石は男の數人と女數人とに變つて居たのであつた。

(希臘神話)

(希臘神話)

◎アポロ神とダフネ女神

一日のことである小さな愛の神のキユーピッドと申すが或る川の岸邊に坐つて矢を弄んでゐたその矢は如何にも小さなものであつたが黄金の鏃の附いたのもあれば鉛の鏃のついたのもあつていづれも餘り痛手を與へやうとも思はれなかつた。

その日威望高き日の神のアポロも同じ川の岸邊を逍遙し給ふたがそれはバイソンといへる險惡い蛇と闘ひ給ふた歸りがけのことであつた。

アポロ神はこの巨大な蛇を射殺し給ふにその背に負ひ給へる不思議な黄金の矢を幾本もなく使ひ給ふた擧句のことであつてバンソン退治に氣も抗り給へる折柄としてキユーピッドの矢を弄べるを見給ひて「なんだ斯んな脆弱い矢が物の役にたつものか」と宣ふた。

キユーピッドはこれ聞いて酷く氣を悪くして一言もいはずにおのが小さな矢を

手挟んでバアナツサス山の絶頂に飛び去つてしまつた。

キュービッドは草の上に座つて鉛の附いた矢を一本箆から取り出して何かその矢の標的もがなと邊りを見廻はしてゐるうち偶ダフネ神が森の中を散歩してゐるの目がついた。ダフネ神といふは川の神のビーニアス神の娘であつてその美しいことといつたら百花の睡つてゐるのもこの女神の姿が見ゆればいづれも頭をあげて忽ち眞盛に咲き競ふほどであつた。キュービッド神はその鉛の鏃のついた矢をダフネ女神の胸に射あてた。この鈍い鉛の矢は格別の傷害は與へなかつたがこれが爲めにダフネ女神は怖ぢ恐れて夢中になつて逃げ走つた。

それから悪戯なキュービッドは箆から黄金の鏃のついた矢を取つてこの矢でアポコ神を傷つけた。この黄金の鏃の矢にはアポコ神に何んでも初めてその目に留つたものを愛させる力があつたのである。初めてアポコ神の眼に留つたのは川の女神のダフネであつてダフネは丁度その折黄金色の頭髮を背後の方に振り亂して走せ寄つ

(希臘神話)

て來たところであつた。

アポコ神はダフネ女神に呼ばはつて何も恐るることはないといつたが女神は矢張り走りに走つて止まないのでその後を追つて走つた。ダフネは愈々速く走つてその間女神は益々怖ぢ恐れたのは鉛の鏃のついた小さな矢が胸に刺つてゐたからである。

女神は走りに走つて遂に父の領分の川の岸へ着いたがこの時には疲れ果てて既う一步も先へ走れないので聲をあげて父の助けを求めた。父なる川の神はそれを聞きつけてアポコ神の追ひ附かぬ前に女神を一幹の樹に化身させた。光澤やかな常緑の葉とダフネ女神の頬の様な紅い花をつけた麗はしい樹に化身させたのである。

アポコ神は漸くダフネに追つ附いたと思ふと川の岸に立つてゐたのは既う女神ではなくて一幹の美しい樹であつた。アポコ神は斯くもはかなくダフネを失つたので酷う失望し給ふた。ダフネ女神の忘れ形見として遺つたのは此の樹ばかりであつた

(希臘神話)

のでアポロ神はこの樹を愛してこれをおのが堂宇の傍に移し植えさせ給ふた。その常緑の葉で手づから冠を作つてダフネ女神の記念として常にこれを被り給ふた。此の樹は今でも希臘に生じてアポロの月桂樹と言つてゐる。

◎アポロ神鼈甲の琴を得たること

アキユリー神はメニヤ神の子であつて母と共に山の内の洞に住まつてゐた。アキユリー神が漸く歩けるほどに育つた時一日のこと日向へ出て遊ばんものと戶外に走せ出でたるに斑のある鼈甲が草の中にあるのを見た。こんな奇麗なものが眼に留つたので悦び笑みて早速おのが住まつてゐる洞へ持ち込んだ。それから鼈甲の縁に孔をあけ中空の蘆をその内側に結へつけて一片の柔皮と幾筋かの糸とでこれを琴に造り上げた。これが世界最初の琴であつて極めて不思議な音楽がその中に籠つてゐるのである。

(希臘神話)

その夜母が眠つてゐたときアキユリー神はそつと搖籃を匍匐ひいでて月夜に乗じてアポロ神の白色の家畜が眠つてゐた牧場に走せつけて中で好いのを撰り抜き牝犢五十頭を盗んだ。それから自分の穿いてゐた小供靴は、海に投げ込んで了つて柔らかな砂の中を誰が歩いたのか分らないやうに檉柳の大きな枝を兩足に結へつけた斯くて暫くは大悦びで家畜を彼方此方と逐ひ廻した上で山の麓に連れて来て穴の中に押し込めて置いたが、砂の中に残つた足跡から考へて家畜は山の麓へ下したものではなくて山の上へ逐ひあげたものだと思ふのであらう。

満月の光を浴びながら葡萄畑で蔓を刈つて居た農夫が此の不思議な幼兒の家畜を逐ふて通るのを見たが農夫は餘りの事に我れと吾が眼を疑つて信せなかつたほどであつた。其の他には誰れ一人アキユリーを見たものがなかつた。して丁度旭日の上る頃にこの小さな悪戯者は母の住んでゐた洞に立戻つて扉の鍵穴から肉へ滑り込んで瞬く間に自分の搖籃に這入つて鼈甲の琴を確と抱いて終夜そこに眠つて居たや

(希臘神話)

うな様子をしてゐた。

アポロ神は直と家畜の居なくなつたのに気がついた。月の光をうけて葡萄蔓を刈つて居た男はまだその畑で働いてゐた。アポロ神此の邊りへ家畜を逐ふて來られるものやあると問ひ給へばその男は奇異な靴を穿いた幼児が家畜を上下左右に逐ひ廻してゐたことを申し上げた。

翌朝になつて見ると道のあたりは風が常緑樹を吹き荒したやうであつた。小枝はそこゝに散らばつてゐて大きな枝も折れて砂の中に吹き廻されたものやうであつた。四方八方へ歩き廻つた家畜の足跡が残つてゐる外には何も生きた物の足跡とはなかつた。こは如何にも不審の次第ではあつたがアポロ神は自分の幼弟の外には幼児で家畜を逐ひ得るものはないと見て取り直と母のメーヤの洞を訪問ひ給ふた。

するとマアキユリーは搖籃の中に熟眠してゐた。アポロ神がマアキユリーに向ひ

(希臘神話)

(希臘神話)

白い家畜を盗んだことを咎められたればマアキユリーは起き出で兩眼を擦りて家畜とはどんなものかそんな語を聞くさへ今が初めてなる由を答へた。アポロ神は立服し給ひて共々ジューピター神の前に出でて是非の判決を乞はんと言ひ張り給ふた。

兄弟の神はジューピター神の御座の前に出でたるにマアキユリーはこれまで家畜といふものを見たこともなければどんなものやら知りだにせぬ由申し立てたがこの申し立をした折にいやな眼つきでジューピター神を見たのでジューピター神は餘りの可笑しさに失笑し給ふた。その時マアキユリー神は卒然と彼の鼈甲の琴を取つて弾き始めた。その音楽は如何にも微妙であつたのでオリムパス山の神々は皆息をこらして耳を傾けた。ジューピター神の飼ひならし給へる猛き鷲すら音楽の節につれて黙頭き睡氣を催したほゞであつた。マアキユリー神が琴を弾き止めたときアポロ神は斯様な音楽は家畜五十頭に價すといつてもう盗みのことに付ては一言もいふまじと約束し給ふた。マアキユリーはこの事を大層満足に思つてその琴をアポロ神に與

へた。

アポロ神はこの不思議な琴の贈物に對する返禮としてマアキユリに黄金の杖を
與へ給ふたこの杖は眠と夢と富と幸福とを司る力を備へてゐた。その後二ツの翼
がこの杖の頂から羽撃ち出して出で二ツの黄金の蛇がその周圍に捲きついた。アポ
ロ神はこの杖を贈つた上にマアキユリを彼の不思議な白い家畜の牧主にしたので
マアキユリは五十頭の牝犢を元の牧場へ追ひ戻した。それで喧嘩は治つてアポロ
神とマアキユリ神とは無二の睦まじい兄弟神となつた。

◎マアキユリ神と百眼の番人アアガス

アアガスといふは頭の周圍に百も眼のある番人であつた。その睡る時には二ツ丈
眼を閉ぢて他の九十八はいつも見張つてゐたのでアアガスの守つてゐた物を盜むの
は容易なことではなつた。

(希臘神話)

たまたま

偶シユビタア神の妃シユウノがアイオーといへる眉目麗はしき川の女神に嫉
妬の心を抱いたのでシユウビタア神はシユウノの嫉妬の焰から救はんためアイオー
を白い牝犢に化身させた。シユウノはその白い牝犢はその實アイオーならんと疑つ
て百眼のアアガスに目を附けさして置いた。アイオーの境遇は誠に惻然なものであ
つた。父の川の神も姉妹の女神たちもそんなこととは知らず白い牝犢の頭を撫でて
手づから草を食はせなどしてゐた。終にアイオーは川岸の砂の中におのが蹄で自分
の名前を書いたので父と姉妹はこの奇麗な白い牝犢のアイオーであつたのを知つ
た。

(希臘神話)

アイオーが斯んな風におのが家族に身の上を證明すると直にアアガスは川よりす
つと遠く川神や川の女神たちの來られない野原にアイオーを連れ出して己れは
高い丘陵の頂上に居てこれまでよりは一層嚴重に見張りをしてゐた。

シユウビタア神アイオーのために氣の毒には思つたがアアガスが見張りをしてゐ

る間は敢て元の邊に戻さうとはしなかつた。だが彼のマアキユリーは生れてまじ一年にも足らぬ内にアポロの家畜を盗み出したのを思ひ出したので此の悪戯好きのマアキユリーにアイオーをアアガスの手より盗み取らせることにした。マアキユリーは好嬉戯御座んなれと言はんばかりに直とその仕度にかかり平日着けてゐた羽翼のついた帽子や靴は脱ぎすててその邊りの牧者の扮装に身を肖し手には彼の黄金の杖を持ちてぶらぶらと歩きながらやたらに牧者の笛を吹いてゆくうちに路傍に二三の山羊が草を食つてゐるのを見たので此等の山羊を徐かにおのが前に追ふて行つた。アアガスは見張り番をしてゐるのが退屈であつたのでその傍を通行するものがあるれば誰れにでも悦んで話をしかけた。マアキユリーが山羊を連れて来るのを見て酷う喜んでその偽牧者を誘引ひ來ておのが傍に座らせ樹の蔭にて笛を吹いたり面白い話をしたりしてゐた。

マアキユリーはアアガスの傍の石の上に座して靜に笛を吹き始めたその靜かな

(希臘神話)

とは颯々と樹の枝の間より来る風の音のやうであつた。その日は暑い日であつて噪がしき蟬の聲の外には何の音もしなかつた。アアガスの眼の二ツは直に塞がつた。他の眼はマアキユリーの笛の音の催眠術にかからなかつたなら開いてゐたのであらうが柔らかな笛の音は段々と徐かになつてアアガスの他の眼も一ツづつ塞がつて來て遂に二ツだけしか開いてゐなくなつた。この二ツの眼は分明と開いてゐた煌々と光つてゐてマアキユリーの笛を吹いてゐる間もアイオーを監視つてゐた。それでマアキユリーは色々面白話をし始めたところが終にこの煌々としてゐた二ツの眼も他の眼と同じ様に塞いで了つた。今は百も眼のあるアアガスもとつくりと寐入つて了つた。

尙も熟睡させんものとマアキユリーは彼の夢を司る力のある杖で軽くマアガスに觸た上アイオーを首尾よく連れ出した。ジュウノはおのが見張らせて置いた不思議の番人が監視の役目を忘れて睡りしかも斯くまで多數の眼を持ちながら皆同時に

(希臘神話)

睡ることは何事ぞと酷う立腹してその内幾箇か見開いてゐることすら出来ぬほどならばあの様に多数の眼を付けてゐる詮もないことだと言つてその百の眼を悉く奪ひ取つてこれを日頃愛養してゐる孔雀の尾に付けてやつた。今でも孔雀はいづれもその尾に多数の眼を付けて頗る得意の体であるのはその折からのことなんであるといふ。

◎ シーリーズ女神とその娘のプロサーバイン

その一 シーリーズ女神の愁歎

シーリーズ島の山上高く會てエナの溪谷といつた麗しい谷があつた。牧者ですらそれまで高く登つたものは稀であつたが山羊は最も險しくて滑り易い徑路でも巖を攀ぢて登ることが出来るので山羊のみはこの溪に柔らかな香しい草が生えてゐるのを知つて居た。羊も亦此の所まで登つて行くこともあつた。

(希臘神話)

山上の溪谷では他に比類のないものであつた。ここにはズエフオラスといつても稔かで静かな西風の外には風さへ吹いて来たこともなかつた。草はいつも緑でいつも真盛りに咲いてゐた。到る所に生ひ繁つた林があつた清水を噴出してゐる泉も数しれぬほどあつて斯んな愉快な所は外にはなかつたであらう。此のエナの溪谷は『地の母』といつて女神の中でも一番賢いものの一ツに數へられてゐるシーリーズの家郷であつてその谷の麗しいのもシーリーズの居るがためであるシーリーズの全島を蔽ふてゐる驚くべき植物の繁茂してゐるのもこの女神の感化に因るのであるシーリーズは地より生ずるあらゆる産物を司る女神であつて芽を出す麥や成熟する果實の秘密を知つてゐるからである。女神は草花や小羊や小兒等の世話をしてゐるのである。

(希臘神話)

地の奥底から湧き出る泉も皆この女神が司つてゐるのである。

一日シーリーズの小さい娘のプロウサーバインがエナの牧場で遊んでゐた。その髪

の毛は黄金の様な色であつたその頬は林檎の花の淡い紅色を帯びてゐた。彼の女はこの谷間の花の中の花のやうであつた。彼の女が谷の女神等の娘と同じほどの年紀のもの達と連れ合ふていづれも靴を脱ぎすて跣足になつて柔らかな草の上を走せ廻つてゐたその氣軽な態は宛然小羊や小山羊の様であつたやがて打ち連れて邊りに生ひ繁つてゐた草花の莖々菜や風信子や百合や紫 薺 尾などを摘み採つて籠に詰め懐に入れ肩の廻りには野薔薇の長い枝を捲き付けたりしてゐた。ふとプロウサアバインは一つの花草に眼をつけて一切夢中になつて了つた。此の花は水仙の珍種であつたらしいのだ。滅法大きなもので一つの花梗に少くとも百の花が付いてゐた。その香氣の高いことは全島に匂ひわたり海上にのてすら氣がついたほどであつた。プロウサアバインは友達に呼ばはつてまあ来てこの不思議な花を御覽なさいなどいつたが既うその折は他の友達と離れて了つてゐたのに初めて氣がついた。彼女は花から花へと彷徨つた擧句に他の小供等を遠く跡に残して來たのであつた。彼女は

(希臘神話)

走せ寄つていつて此の珍奇しい花を探らんとしたがその莖には蛇のやうに斑紋があるのを見て毒があるのではないか知らず氣遣つた。さりとて斯んな美しい花をこの儘牧場に残して置くのも可惜ものと思つたのでそれを折り探らうとしたが莖が折れないので根ぐるみ引き抜かうと大骨折をした。俄にこの植物の廻りの黒い土が緩んで地の下に轟々と音のするのがプロウサアバインの耳に入つたと思ふうちに大地に俄然口が開いて大きな黒い窖が出來てその底から黄金の車を挽いた四頭の美事な黒馬が躍り出た。馬車の内には冠を戴いた王様が座つてゐたが、その冠の下には何んともいへぬ凄愴い顔が見えた。此の怪異い王が怖ぢけて逃げ出しもえせずに花の傍にイんでゐるプロウサアバインを見て暫し馬をとどめ前に屈みながらこの憐れな少女を掴みあげておのが傍の席に就かせて置いて馬に鞭をあて逸散に驅け出した。プロウサアバインは尙自分の摘み採つた草花の籠に籠りつきながら母を呼ばはつ

(希臘神話)

た。

日の神ヒーリオスは彼の物凄く顔の王がプロウサアバインを奪ひ去つたのを見た
そしてプロウサアバインの住まつてゐる洞穴の近邊に座つてゐた侍女のヘカチーは
彼女の叫び聲と車の響を聞いたがその外には誰れとて何事が起つたと思ふものな
かつた。

母のシーリーズは收穫物の取り納めを監視らんだため海を渡つて遠く他の郷にいつ
てゐたがプロウサアバインの叫び聲を聞いて海鳥が雛の悲叫を聞いた折のやうに海
を渡つて飛ぶがやうに歸つて来た。

シーリーズがその娘を呼ぶ聲は谷中に鳴り渡つたが誰一人プロウサアバインの名
に答ふるものはなかつた。彼の珍奇の花は見えなくなつてゐた。薔薇の花が二三
つ草の上に散らばつてゐてその邊りに小供の足跡があつた。シーリーズはこれはプ
ロウサアバインの足跡に違ひないと思つたが豕の群がその邊りを彷徨つて打ち亂れ

(希臘神話)

たる蹄の跡を残したために遠くその跡を追ふて行くことが出来なかつた。

シーリーズは牧場の女神達に聞いても娘の様子は何も分らなかつたので雨を起す
大きな白い鶴を使者に立てた鶴には強い翼があるので疾く飛び遠く翔りはしたがプ
ロウサアバインの消息は何も得ることが出来なかつた。

その内に暗くなつて来たので母の女神は火の燃えてるエトナ山の絶頂で二本の松
明に火を點けて探索を続け九日九夜の間といふものは山に登り谷に降りなどしてそ
こらをさ迷つた。十日目の夜の明けんとする頃に侍女のヘカチーに出會つたが矢張
り何か探してゐたものらしく松明を手にしてゐた。ヘカチーはプロウサアバインの叫
び聲と車の音を聞けども何にもものも眼にはつかかなかつた次第をシーリーズに語つた
それよりヘカチーは女神に隨ひて日の神ヒーリオスの許に到り當日起つたことを見
給はざりしかと尋ねた日の神は全世界を周り歩いて何事も見知つて居給ふ筈だから
だ。

(希臘神話)

シーリーズはヒーリオスの許にいつたときは今や大空に馬を驅らんとして馬車に
打乗つての給ふところであつたが、駿馬を暫し駐めてシーリーズに向ひ地獄の王の
ブリエウトツガ女神の娘を盗んでその暗黒な宮殿に同棲せんものと伴ひ去つたのだ
と告げた。

シーリーズはこれを聞いてプロウサアパインは既う戻て来ることはないといふこ
とが分つて他の神々と交通を絶ちて下界の暗い所に身を隠した。斯く下界の民とも
他の神々とも好んで離隔したのは何所へ往て見ても數人の小供を身の周りに引連れ
てゐて幸福な母たるものに遇ふばかりであつてその光景を見るにつけても吾が子の
ことを思ひ出で物淋しく感じたからなんだ。それで女神は貧乏な水呑百姓を羨し
く思ふこともあつた。樹にゐる小鳥の母をすら羨ましく思ふこともあつた。

一日女神は路傍の椶櫚の樹蔭にゐる井戸の邊に座つてゐるうちにセリアス王の四
人の娘が黄金の瓶を肩に負ふて父の宮殿から水を汲みに下りて來た。井戸の蔭に悲

(希臘神話)

しげな老媪が座つてゐるのを見て娘達は深切に話をしかけた。

シーリーズは自分の女神であることを悟られまじと思つて自分は海賊に勾引され
たものであつてその海賊の船が海岸に着いたと思ふ頃駈け出して辛くも奴隸に賣ら
れるのを免れたのであつたと四人の王女に告げた。

シーリーズは「私は年老いました此所に知縁もありません。それでも未だ食べ稼
ぎの出來ぬほど老老はしません、家事の世話も出來ますし小兒の保母も出來ます」
といつた。

これを聞いた四人の姉妹は急いで宮殿に立ち戻りこの奇異な婦人を王宮に伴ひ歸
りたき由許を乞ひました。姉妹の母は幼弟のデモフラーオンの保母として雇ひ入れ
てもよいと云つた。

それでシーリーズは王宮に住み込んでデモフラーオンはその養育の許に稀代に立
派な發育を遂げた。

(希臘神話)

シーリーズ女神今はおのれに委託せられた人間の幼児を愛することを覚えてその
幼児を不老不死のものとなさばやと思つた。女神はこれを爲る途を唯一ツ知つてお
たぞは不老の人參といふのに入浴させて置いて幼児の死すべきところを焼き切つ
て了ふまで毎夜火の中に入れるのであつた。で誰れにも一言も告げずに毎夜この術
を施してゐたるにデモフラーオンは稀代にも神の様になつて來た。しかし一夜、デ
モフラーオンの母が夜深けて目が覺めて誰れか動いてゐる氣振りのあるので帷帳を
少し引き寄せて覗いて見たところが火の炎々と燃えてゐる火爐の前に怪しの保母が
デモフラーオンを抱いて立つてゐた。母は黙つて氣を附けてゐたが遂に小兒を火の
中に入れるのを見たので驚いてキャット叫び聲をあげた。

この叫び聲が氣合を破つた。シーリーズはデモフラーオンを火中より取り出して
床の上に据えた上で戰慄へてゐる母にこの兒を不死の人とする積りであつたが今は
既う出來なくなつたといつた。でデモフラーオンは年も老いゆき普通の人間のやう

(希臘神話)

に死ななければならぬだらう。やがてシーリーズは今まで被つてゐた藍色の頭巾
を投げ捨てるよと見るまに年老いた姿は變つて至て嚴に至て麗はしう見えた、肩の
上に垂れてゐた髪は黄金色をしてゐた。デモフラーオンの母は斯様な徴表より推し
て我が兒の保母はシーリーズ女神に違ひないと思つたが夜の暗さに紛れて出で去つ
たので既う見えなくなつてゐた。

此より女神は當所もなしに淋しい彷徨を續けてゐたが一日のこと女神は躊躇んで
泉から水を飲んでゐたら傍に立つてゐたエーバスといふ顔に痣のある兒童が女神
の悲しげる且年老いた態を見て嘲り笑つた。すると女神は恐ろしい顔色をしてスツ
クと立ち上つたと思ふうちにエーバスは自分の身体が段々小さくなつて來る様な心
地がして到頭縮つて斑のある小さな蝶鯨になつてしまつたので急いで石の下に身
を隠して了つた。

シーリーズに出遇つた人々はエーバスとは違つてその身の上を氣の毒に思ひ同情

(希臘神話)

を寄するものが多かつた。一日希臘の或る山路の傍なる石の上に悲しげに休息んでゐるうちにふと少女の聲で「お母様斯んな山の中に唯一人であらしつてはお怖くはムんせんか」といふのが耳に入つた。

シーリーズは顔を上げて「お母様」といふ語を聞いて悦んだして農家の少女が山腹の牧場から追ひ下して来た二頭の山羊の傍に立つてゐるのを見た。

女神は「否怖くはありません」といつた。

丁度その折に林の中から一把の薪を背負ふた少女の父が出て来て今夜は私の草舎にお泊んなさいとシーリーズを誘引つた。初めは拒んだが果はその誘引に應じた。

三人連れ立つて草舎の方へ歩みながらシーリーズは「貴方はお任せですね、こんな嬢さんがおありなすつて私は娘を失つて了ひました」といつた。

さてさてお氣の毒なことを………私の一人息のトリプトレマスも大病で今度は助かるまいと思ひます』と農夫がいつた。

(希臘神話)

「どうか本復るやうにしてあげたい」と女神はいつて腰を屈めながら一握の罌粟を摘み取つた。

(希臘神話)

間もなく草舎へ着いた。着いて見ると病兒の母は悲痛の涙に暮れてゐた。

シーリーズは小兒に倚り添ふて靜に雨頬に接吻した。その折女神の手に持つた罌粟が軽く小兒の顔を擦り掃つた。思ふと小兒の呻吟の聲が止んでやすやすと寢入つた。

その翌朝にトリプトレマスの目が覺めたときは既う強壯健全の小兒となつてゐたしてシーリーズが羽翼のついた龍を呼び起して雲間に駆け去つた跡に残れる農夫の一家族は幸福に日を送りシーリーズの恩恵を感謝してゐた。

その二。プロサアバイン歸る。

シーリーズは行方知れずになつた娘のプロサアバインの事を思ひ歎いてゐたその間は褐色の土地に潜んでゐる穀類の種子の世話をするのを怠つてゐた。それがため

に種子は芽を出して生長することも出来なかつたので粉に碾いて麵包をつくる穀物がなかつた。穀類の種子ばかりではない總て生育つてもくものは皆シーリーズの手を離れた。草は褐色になつて萎んで了ひ橄欖園の樹は葉を落し小鳥は皆遠い國へ飛び去つて了つた。エナの谷の泉の邊に放つてあつた羊すら見るも惘然に瘦せ衰へて來た。

地の母シーリーズなくば地上に生氣なく遂には人類も動物も食物に事缺きて死にもやせんとジューピター神は早くも看取り給ふたので彼の虹を司るアイリスに告げて空に虹の橋を架けしめシーリーズがその娘のために歎き悲んでゐるあの薄暗い洞に降りてゆき女神に勸めて悲しみを忘れ野原に立ち戻りて地の母たる仕事に就かしめよと命じ給ふた。

アイリスはシーリーズがおのが住居とせる洞の隅の木蔭に座してゐるのを見たが黒ずんだ藍色の羅紗に包括まつてゐたので殆んど目に留らぬほどであつた。虹を司

るアイリスが來たのであるから洞の隅々まで明るくなり鮮明やかな七色はあたり目眩きまであつたが、シーリーズを笑み悦ばすことも出来なかつた。

次でジューピター神は交互に使の神を洞へ向けて遣つたが一として地の母を慰め得なんだ女神は依然愁歎に打ち沈んでゐた。

ジューピター神はマアキユリー神をプリユートーの王國に遣はし彼の妻儉い王に勸めてプローサアバインをその母に戻さしめんとし給ふた。

マアキユリー神がプリユートー王に使命を告げればプローサアバインは再び母に遇はんものと嬉しさの餘りに、わが椅子より躍りあがつた。プリユートーもその態を見ては不承諾を唱へることが出来なかつた。それで黒馬に黄金の馬車を出してプローサアバインを送り戻させた。だが彼の女が躍つて車上の席に就かんとせる前に庭園に生ゐてゐた石榴の實を食べてはどうかと言葉巧みに彼の女に勸めた。

プローサアバインは石榴の實を取つて丁度四粒の種子を味つた。それより黒馬は

快走してマナキユラーとブローサアバインを上界に運び直ちにシーリーズ女神の洞に着いた。

悲喜一變。シーリーズは娘の聲を聞き忽ち洞より走せ出でた。今は早や暗い影に引つ込んで愁歎したのも夢と消えた。

ブローサアバインは母に一伍一什の物語をした——珍奇な百合の花を見附けたこと、大地の口を開いたことブリュートー王の馬の躍り出たこと、物凄く王に掴み取られて連れて行かれたことを語つた。

『だがブローサアバインよお前は下界に行つてから何か食べはしませんか』とシーリーズが氣遣はしげに尋ねた。

ブローサアバインは石榴の種子四粒を食べたと白状した。それを聞いてシーリーズは胸を打つて落膽した。それで今一度ジューピター神に訴へて、ブローサアバインは毎年八ヶ月は母の許に暮させますが残りの四ヶ月（石榴の種子一粒に付き一ヶ

(希臘神話)

月の割は)下界に降りてブリュートー王と共に過ごさねばならぬと言つた。

斯くてシーリーズはエナの美しい溪谷に戻つて野に出て仕事に就いた。長い間眠つてゐた小さな褐色の種子は芽を出して生長した泉は水を噴きあげた丘陵の上の褐色の草は緑色になつた橄欖の樹や葡萄蔓は新しい葉を出した。小羊や小山羊は繁殖して前よりは活潑に跳ね廻つてゐた。小鳥の群はシーリーズの飼ひ馴らした鶴に導かれて戻つて來た。

ブローサアバインが膝下にゐた八ヶ月の間シーリーズ女神は再び農民の間を巡廻し男が穀類の穂を打落してゐるのを視廻つたり婦人が麵包を焼くのを手傳つたりその外何くれと世話をやいてゐた。女神は彼の希臘の農民の家族の草舎に案内されて一夜を過しその小兒のトリプトレマスの病を癒やしてやつたことを忘れなかつた。女神は此の家族を再び訪問ひて年若きトリプトレマスに吾が家郷のシシリイの農民と同様に耕作や種蒔や刈入れの仕方を教へてやつた。

(希臘神話)

プローサアバインがブリュートー王の所へ戻つて行かねばならん時が来た。同時にシーリーズ女神は以前のやうに洞の内の暗い影に引籠つて了つた。自然界は又暫らく寝入つて了つた。たが農民等はプローサアバインの訖度戻つて來ること戻つて來た上は地の母たる女神に再び農事萬端の世話をやいて貰へることを知つてゐるので此の度は恐怖の念を抱かなかつた。

◎フエーイーン

フエーイーンは日の神ヒーリオスの子であつた。そのつやつやした金色の毛髪には日光の閃めきを想ひその眼の光輝には日光の温熱を感せしめ活氣は溢れ元氣は盛んであつて人々その風采に接するを快とするほどであつた。村の兒童等と遊んでゐて共々石を投げれば一番遠くまで投げ得たのはフエーイーンであつた。競走を試みていつも第一着に目的地に達したのはフエーイーンであつた。その他何の遊

(希臘神話)

戯をしても此の通りであつた。

(希臘神話)

村の兒童等は遊戯の上でフエーイーンを打ち負かすことが出来ないので一日のこと何と加して彼を挫いてやりたいものだと談合ふて口を揃へて彼を嘲り罵つた。果はヒーリオスの子ではないと言つたので酷くフエーイーンを氣を悪くさせた。光輝赫々たる日の神は吾が父なりといふのを日頃榮譽の事と思つてゐたからである。

翌朝凝と目を眺めながら樹の下に横臥つてゐる日の神のヒーリオスが空中に黄金の馬車を驅つてゐるのが見えると思ふた「私は未だ小供だがあの立派な馬車を驅つてもくことが出来たら何んぞまあ結構なことだらう。さうしたら兒童等は私が本當に日の神の子だと思ふだらう」と獨語いた。

斯んな考が頭に浮んだと思ふうちに日の登る國へ行かんとて直様出發した。長い旅ではあつたが遂に日の神の黄金の宮殿が見えて來た。その内段々近づいて來た

らヒーリオス神が頭に冠を戴き椅子に着いてゐるとアワーズ、デーズの二神が左右に侍つてゐるのを見た。ヒーリオス神の被つてゐた冠は稀有の冠であつて、眼もまばゆき寶玉の數々が象眼されてゐた。この寶玉は光輝燦爛として四邊に閃めき、長く見てゐるものの眼を盲せしむる程であつた。

フエーイーンンの眼にも長くはこの冠の光輝に堪えきれぬので稍後方に避けて名告をあげ且は村の兒童等の言つたことをヒーリオスに告げさて何とかして自分は日の神の子に相違なきことを遊び仲間に信せしむる工夫はないかと尋ねた。

日の神は冠を脱ぎ給ふたのでフエーイーンンは近寄ることが出来てこゝに何なりとその子の願を叶へてやらうと約束し給ふた。これは大なる恩恵であつてフエーイーンンが日の神の眞の子でなくば愛くる筈がない。

フエーイーンンは手を拍つてその成功を喜んだ。今こそおのが願は叶つたと思つたからである。侍者のアワーズは早や日の神の黄金の馬車を曳き出してゐた。して

(希臘神話)

その馬車は殆んど日の神の冠ほど光り耀いてゐた。フエーイーンンは直と一日の間この馬車を驅つてもよいかと尋ねた。

日の神は斯様な願を聞いて迷惑に思ひ給ふた。だが既う約束した後のことである神々は約束を破り給ふ譯にはゆかぬ。それでアワーズが馬を引き出してなにかも用意が出来た上は是非なくフエーイーンンに手綱を取らせなければならなかつた。

日の神の馬は勢力の盛んな動物でその性火の如く牡牛や龍が火の息をついたといふ、その頃にも猛烈な生物といへたのである。これ等の馬の體內には火が燃えてゐる様に思はれた。それで後足で立ち擧つたり跳ね廻つたり、轡を噛んだりする態を見れば大抵の兒童は震ひあがつて怖ぢ恐れたであらう。だがフエーイーンンは自ら日の神の子であると信じてゐるので悦んで此の馬車に乗つた。

四頭の馬は一躍して寛げ出した。フエーイーンンの身體が餘りに軽いので空馬車を驅るが如くに右や左に動揺れたと思ふ間に馬は驚いて世界の周りの正しき路を踏

(希臘神話)

み外れてあちらこちらと走せ迷ひながら荒れ出した。

フェーイーソン今は遅時きながら斯んな馬を御するにはまだ年齢の若きを覺えた馬は益々激して來た火焰はその鼻孔を突いて出た。馬車も亦益々速く空間を馳するはずみに彌々輝き彌々熱くなつて來た。

馬と車とが地球に近よつた折に山々の絶頂に火がついて煙り出した。馬と車とはもつと近づいた。河々の水は乾涸つた幾里となき森林や緑の牧場は焦げて沙漠のやうになつた。或る國々の人民は皮膚の色が黒くなつたほど酷い熱氣を受けた。此の分では全世界が燃えて了ふのではないかとまで思はれた。

此の時フェーイーソンの髪の毛に火がついたので酷く怖ぢ恐れたが、何んとせん術もなかつた。

ジューピター神はオリムパス山より見下し給ひて、世界が大危険の有様であることを知り給ふた。折しも耳を聳くやうな恐ろしい雷鳴が俄に轟きわたつた。と思ふ

(希臘神話)

間にフェーイーソンは馬車から落ちた墜星の如くにイーリダナスといふ大きな河の中に落ちた。

さても憐れなフェーイーソンは日の神の子ではあつたが、父の馬車を驅らうとしたので失敗した。彼は遊び仲間の不深切な嘲弄を受けなかつたなら、大方斯んな大膽な所業を企てなかつたらう。世には日の神の子ですら物によりては出來ない事がある。

姉妹のヘライイアーズはイーリダナスの河岸に來てフェーイーソンのために泣き明して果は落葉松に化身して了つてその涙が引き續いて松の枝から落ちてゐたが、それが固まつて透徹つた琥珀の粒々となつた。

◎川の女神クライナイ

クライナイとその妹リユーコーシアは共に川の女神であつた。毎朝早く相伴ふ

て川の底深くより浮み出で近邊の川や泉より来る女神と共に川岸の水草の間に舞踏するのを習慣としてゐた。だが旭が登ると直に舞踏者は皆水の中に潜つて跡をくらました。これは川の女神等が間の掟であつたからである。

ある朝クライチーとリユーコーシアがこの掟を犯した。旭が東の山にさし登つて他の女神等は皆川の底へ潜つて了つたのに、此の姉妹の女神は川の岸に座つてゐて日の神の来るのを待つてゐた。すると日の神ヒーリオスは空間に駒馬を駆つて来たが、姉妹の女神はそのまま座つて終日見てゐた。

姉妹の女神はこれまで斯んな壯嚴なものを見たことはないと思つた。日の神は頭に寶冠を戴いて黄金の車中に座し、火の息を吐いてゐる駒馬の手綱を握つてゐた。姉妹は馬車の光輝と寶冠の閃光に眼も眩むばかりであつたが、日の神は姉妹を見て微笑を漏らし給ふたので姉妹の喜は此の上なかつた。

夜に入つて姉妹は川に歸つてからも日の神ヒーリオスと黄金の馬車のことばかり

(希臘神話)

思つてゐた。

夜の明けぬ前に姉妹は喧嘩を始めた。その折姉のクライチーは、オーシアアナス王に妹リユーコーシアが、川の女神の掟を犯したことを訴へたが自分も亦犯したことは告げなかつた。オーシアアナス王は酷く怒つてリユーコーシアを洞穴の内に押籠めて了つた。

旭の登らぬ前にクライチーはいつもの様に他の川の女神等と共に舞踏に出かけていつて、此度も亦日の神を見ようとと思つて終日川の岸に留つてゐた。今度はヒーリオスも笑顔を見せ給はなかつたクライチーが妹に不深切であつたことを御承知であつたからである。夜になつても川の底の家にも戻らずに砂の岸に坐つたままで日の神の出で給ふのを待つてゐて、日の神が再び出で給へばクライチーは終日見てゐた。斯くすること九日九夜になつた。彼女は掟を犯したので敢て家に戻らうともせなかつた。それで食へるものといつたら空から落ちて来る露の外には何もなかつ

(希臘神話)

た。彼女は酷く瘦へて仕舞つて、風にも吹き飛ばされさうであつた。何といふ痴呆なクライチーだらう。

それでも彼女はそこに坐つて日の神を見つめてゐたが、日の神はついぞ振り向いて見給ふたこともなく、又と笑を漏らされたこともなかつた。果は他の川の女神等とあんなに輕妙に舞つたことのあるクライチーの上品な足は、砂の中に根づいて翩々したるその衣裳は緑の葉になり、いつも日の神の方に向いてゐたその顔は花になつた。この花は今でも濕つばい砂地に生じてゐて、その莖を徐かに廻つていつでも太陽の方に正面を向けてゐる。

◎七人の姉妹神

月光の女神ダイアナの従者たる川の女神等の内にはアトラスの娘の七人姉妹があつた。この姉妹等は月の夜には林の間の空地に出て舞踏するのを習慣としてゐたが

(希臘神話)

(希臘神話)

一夜獵人のオーライオンといふが林の間より朦朧とこの姉妹等を見た。姉妹等は美しい野禽の群のやうに見えてその光景が獵人の胸を高く、且速く鼓動させた。獵人はこれまで幾度となく鹿を狩した手心地で、此の川の女神等を狩しやうとした。獵人は女神等を傷つける積りではなく、只もつと明瞭に見やうと思つて近寄らうとしたところが、女神等は恐れて疾く林の間より逃げ出した。彌々速く走れば獵人のオーライオンも彌々速く跡を追ふて來た。

怖れ恐れた憐れな姉妹等は終に晝のやうに明るく打ち開いた所に出たが、ここであくオーライオンに追ひつかれんとしたので姉妹等はダイアナ神の助を呼んだ。あはや獵人の手に捕へられんとする刹那姉妹等は俄に消えて失せたと思ふ間に姉妹等の今までの草の中から七羽の白鳩が飛んでいで、夜の空に高く高く翔去つた。この七羽の鳩が空に達したと思ふと七ツの燦爛たる星となつてゐた。こゝに數百年の間この星は寄り添ふて一群をなし、光輝を放つてゐた。これを七小星と云つて

ゐた。

怖ぢ恐れたる川の女神等は先づ鳩になり、次いで星になつた後久しくして七姉妹の
一がトロイ（小亞細亞の一都市）の落城を見得なかつたとて、七星の群を離れた。
此の城の燃えてゐる間彼女は髪の毛を背後に振り亂して狂氣のやうに空間を突進し
てゐたので、人々彼女を彗星といつてゐたが、到頭七星の群の中に戻らなかつた。
獵人のオーライオンは、此の世で死んだ後に星の群の中に加はつて、今尙獅子の
皮や棍棒や寶石入の帯を身に添へて空にゐるのである。七星は今でもオーライオン
を恐れて逃げ廻つてゐるといふ人もある。

◎エンデミオンの睡眠

原野は夏の炎熱のため焦げて褐色になり、塵埃に塗れてゐたのにラトマス山の上
は他の世界にでもゐるやうで静で涼しく鮮やかに緑であつた。この山は夜に入ると

（希臘神話）

頭の上には月が銀の馬車を驅つて白い光を樹々の梢や草の生ひ茂つた斜坡に浴せか
けたので言ひしらす美しい景であつた。

（希臘神話）

エンデミオンは年若い牧者であつて此の山の山腹の高い所へ羊の群を引いて行つ
て、雪の融けて流るる川の端に沿ふた豊かな牧場の若草を食せてゐた。彼は山の清
き空氣や高い山腹の静なのを愛した。耳に入るのは羊の背にかけた鈴の音か鳥の歌
ふ聲ばかりであつた。ここに彼は晝の間は羊と山羊に草を食はせながら、夢のやう
に日を送つてゐた。夜になると丸木や苔の生じた岩に頭を倚せかけて羊の群と共に
眠つた。

月の女神シーリーネはラトマス山を見舞ふのを愛してゐた。實際この山は女神の
ものだといつてもよいのであつた。眼に觸れ耳に入る一切のものを斯く安靜に、か
く清麗にしたのは女神の感化であつた。一夜女神は空を脱いで、人知れずラトマ
ス山の花咲き匂ふ牧場の一ツを逍遙した折しもそこにエンデミオンの眠つてゐるの

に眼がついた。

この牧者は山上の花ほどに美しく見えた。邊りの湖に頭を翼の下に挿し入れて浮んでゐる。白鳥は冬に清らであつた。若し呼吸でもしてゐなかつたなら、シーリーネ女神は大理石の肖像の前に立つてゐた様な心地がしたであらう。直く傍には番人もついてゐる。野獸の爪牙にかりさうな様子で、羊と山羊とが伏してゐた。さてもエンデミオンは不用意な牧者ではある。これもラトマス山上の空氣のなす業であつた。

シーリーネ女神はこの牧者を斯くも無頓着に且清美になしたのは、ラトマス山の不思議な空氣のためだと知つてゐたので、終日羊の群の傍に留つて自から氣を付けてやつた。

女神は次の夜も又次の夜も幾夜となく來ては、眠つてゐる牧者を凝視してゐた。守られてゐない小羊に氣をつけてゐた。或る朝女神が空より戻つたときその顔色の

(希臘神話)

(希臘神話)

餘りに青白かつたので、ジューピター神は訝しげに何處にいつてゐたのかと問はせ給ふた。それで女神は山上に美しい牧者を見たことを述べ、且つ羊の群の番をしてやつたことを白状した。

それより女神はジューピター神に乞ふてエンデミオンは如何にも美しい故いつまでもその眠つてゐる姿でゐて、他の人間のやうに年老ゆることのないやうにと願つた。ジューピター神はこれに答へて「縦令ひ神々の力たりとも人間に無窮の若さと美しさを與へんとならば亦これに無窮の眼を與へでは叶はぬぞや、さればエンデミオンは無窮に眠らせ無窮に若からしめん」と宣ふた。

さればラトマス山上の洞の中には今も尙エンデミオンは眠つてゐる。彼が不思議の美は毫も失せなかつた。それで今尙能くこの高い山に登る人々の喜びとなつてゐる。

◎フェニシヤの太子カドマス一都城を興

したる由來

其の一。太子の妹イウローバの失蹤

一日イウローバといへる少女が濱邊に近き牧場で遊んでゐた。彼女は膝に澤山花を載せて草の上に座つて花環を編み三人の兄のカドマスやフェニスやシリツクスに贈らうとしてゐた。時にその兄達は妹より遠く離れた所にはゐなかつた。ふとイウローバは仰いたところが美しい銀のやうな角のある雪白の牡牛が傍に立つてゐるのを見た。初は恐ろしく思つたが、牡牛は柔和な様子していかに親切げに彼女を見たので毫も恐くはなくなつた。彼女は首蓆の花を取て牡牛の傍に走せ寄つてその口に宛行つた。

牛はその花を甘さうに彼女の指さきより食べた上で殆んど鳥のやうに身輕に草の

(希臘神話)

(希臘神話)

上を跳ね廻り始めた。果はイウローバが花環を編んでゐた所へ来て、その傍に匍伏んで仕舞つた。彼女は牛を撫でてやつたり角の上に花環を投げかけてやつたりしてその奇麗に見えたのを見て手を拍つた。それより彼女の女は牛の脊に上つたれば、牛は起きあがつて彼女を乗せたまままで牧場を駆け廻つた。イウローバは牛の白い角の一ツに取り縋り面白がつて笑ひながら乗つてゐたので牛が段々家より遠ざかつて濱邊の方へ連れていつたのに氣がつかずにあるうちに、牛は突然海に躍り込んで彼女を乗せたまま泳ぎ出した。それで彼女は怖ぢ恐れて聲を張りあげ兄達を呼ばはつたので、兄達は聞きつけて濱邊へ馳せつけはしたが、白牛を引き留むるに由なく妹のイウローバはみすみす連れてゆかれて又と姿を見ることも聲を聞くことも出来なくなつて仕舞つた。

三人の兄弟が父のアジーノア玉に事の始末を告げれば、父は大に落膽し且酷く立腹し、年輪もゆかのイウローバを二人に手離して置いたが悪いと言つて取り分け

長男のカドマスを買めた。果はカドマスに向ひ「まあ行つてイッローバを見付けて連れて来い、但し汝の力にて見付からぬとならば決して二度と汝が父の宮殿の門を潜るな」といつた。

此の時分には胸壁を繞らした都門をいでて遠く行くことは幾多の危避に遭ふの恐れがあつた。それで父は二人の奴隷を同伴につけてやつた。

三人が出發したあとで大きな都城の門々は閉ざされた。三人は牡牛が行つた方向は西であつたので矢張り西の方へと歩んでいつた。淋しい森を通り山脈を越え、海を渡つて他國を遍歴して見たがイッローバは見當らぬのみか何等の消息も耳に入らなかつた。カドマスは今更搜索しても全然無功だと思つた。

其の二。カドマスと龍

カドマスは妹を連れずには家に戻る氣になれないのでアポロ神の拜殿に詣で何と致したものかと神託を乞ふた。アポロの拜殿はバナツサス山の麓の洞の内にあつ

て神託といふのは山の奥底から出て来るやうに聞える不可思議な聲であつた。その聲がカドマスに告ぐるには白い牝犢を見たならその跡を追ひ行き牝犢の偃臥した所に後日一都城を建てよとあつた。

牝犢が撰んだ塙所の近くに古木の森があつて森の内の岩の多い所に洞があつた。

洞の口は柳の樹で塞がつてゐたのでその内部の様子は分らなかつたが、カドマスの耳には水が潺潺と流れてゐる様に聞えてその音がいかにも爽涼しげに且心をひかれもやうにあつたので奴隷の一人を洞の中に遣つて泉を捜させたが戻つて来なかつた。それでカドマスは今一人の奴隷をやつて初めに遣つた奴隷の行方を探らせたがそれも亦戻つて来なかつた。

それでカドマスは獅子の皮を肩の廻りに投げかけ鎗と投槍とを持つて自から洞穴の口へ這入つていつた。初めの間は内部が暗くつて何も見えなかつたが、今まで日光の強いのを受けてゐた眼が明暗の變化に馴れて来たので初めの暗い所に煌々した

る一ツの點が見えた。これは必定何か野獸の兩眼に相違ないと見て取つた。段々眼が分明として來たら巨大な龍がその醜い爪を何物にか引つ掛けてゐる姿が見えたがその爪を掛けてゐるのは忠實な奴隸の一人の體ではないかと懸念した。カドマスは大きな石を拾ひあげて正面に怪物の頭に投げつけたが、龍の鱗が如何にも硬くて軋いので石は嘯げ落ちて何の害をも與へなかつた。それから投槍を投げつけて龍を傷けはしたものの、中々弱らないでシユウとうなつて洞穴から出て來て、猛烈にカドマスを襲つた。カドマスは龍の押し寄せて來るのを見すまし鎗を正面にその開いた口に突つ込んで、遂にそこに生えてゐた樺の樹に撞き止めて到頭殺して了つた。

カドマスはその龍を睥視して立ちながら怪物は殺したものの、二人の奴隸を失つて今は異郷に孤獨の身となつたが、此所に神託に従ひ都城を建てねばなるまいと感じた。偶々カドマスは誰かおのが傍に立つてゐるのに氣が付いたので仰いて見たら、身長の高い勇氣のありさうな眼光炯々したる婦人であつて、手には鎗を持ち頭には

(希臘神話)

(希臘神話)

兜を被つてゐた。カドマスは一見して軍の女神ミナアバなることを知つた。それで此の女神を見たので勇氣の回復して來た心地がした。

ミナアバ女神は附近の土地を耕して龍の齒を蒔きつけよとカドマスに告げた。カドマスは奇異な種を蒔けといつたもんだと思つたが、女神の命するままに蒔いた上でさて何んなことになるものかとその成り行きを待つた。暫くすると蒔いたあたりの土地が少し膨れあがつて來たその状はさながら穀物の芽を出すときのやうであつたがこれは穀類の嫩葉ではなくて尖つた鋼の穂先が見えて來た。それが追々延びて來たら鎗の鋒の様に見えた次には胃が幾個も列をなして現はれ、果は武装した軍人が地中より生じいで、四方を睥睨へ戦鬪の身構へをしてゐた。

カドマス今は龍よりも恐るべき強敵が現はれたと思つて防禦の覺悟をしたがその必要がなかつた。その故は武装の軍人が地中より抜けいでたと思ふ間もなく同士打を始めてその多數は忽ち斃れて了つて生き残つたのは僅に五人であつた。

この五人は他の兄弟等より賢かつたので、斯く兄弟で同士打をしても何の益がな
いと氣がついて武器をカラ〜と地上に投げ棄てて互に握手し今よりは相助け事
に當らんと約した。

これは好い分別であつた。カドマスも皆の者と握手して其々力を合せて牝犢が偃
臥んだ所に都城を建てた。此の新都城はシーブズといつて繁昌した。皆の者はカド
マスを王に推し戴き多年の間此所に幸福な日を送つた。

◎バアシユウス

其の一。バアシユウスとミージュエーナ

アーゴス王アクリシアス曾てデルファイ邑にてアポロ神の神託を聞いて大に驚き
怖れた。其の神託にはアクリシアス王はおのが孫の手に殺さるべしとあつた。さて
王には只一人の娘のダナエといふがあるのみであつたが、神託の實現を恐れてダ

(希臘神話)

ナエーを堅牢な眞鍮造の塔の中に押籠めて了つた。

それでも春が来て日ざしは暖かになり、草木は嫩葉を出し、花を開き小羊が野原
で咩いてゐる時分に黄金色の髪の子が塔の内に生れたといふ報知がアクリシアス王
の許に達した。

(希臘神話)

この黄金児は碧眼で清らかな白い膚で黄金髪をもつた美しい嬰兒であつて希臘人は
其の美貌に驚いてゐた。

アクリシアス王はこの報知に狼狽へて直とダナエーと其の黄金児は眞鍮の金具を
打つた櫃へ入れて海へ流して了へと命じた。

夫れでダナエーと嬰兒は徐に大海へ及び出で友とするものは鵝や其の他の小さな
水鳥より外はなかつた。波は靜に櫃を動揺したので黄金髪の嬰兒は母の腕に縋り眠
つて了ひ何んの恐しいことも知らなかつたが、ダナエーは暴風怒濤の事や海にゐ
る蟻や其の他の大魚の事などを思つて恐怖の念は胸一杯であつた。

櫃は終夜静な海の上を漂つたが翌朝になつて潮は其の櫃をシーライファス島近くまで寄せつけそこで漁夫の網に絡つた。網の持主たる漁夫のデクチスは其の日の獲物は如何にと立ち出でたるに櫃の漂へるを見てこれを引寄せた。漁夫はダナエーと嬰兒とをこの島の王であつた兄のポリデクチーズに引合せた。王はダナエーのこの島に留らんことを希望したのでダナエーは其の深切を難有く思つた。漁夫のデクチスと其の妻は吾が家にダナエーを引取り手の届くだけ慰安を與へたので彼女はここに好い家郷を得た。

この黄金兒に母のダナエーはバアシユースと名を付け追々生長して見ると強健で立派な少年に成つて到る所に人々の心目を動かした。ポリデクチーズ王はあの眞鍮の金具を打つた櫃がシーライファス島に漂着せなかつたら好かつたにと思ひ廻らして酷くバアシユースを嫌ひ果は靦面に憎むやうになつた。バアシユースが彌々強健に且立派に生ひ立つて行き又その若盛りの強健と美とが彌々世人に稱讃されるれば王

（希臘神話）

は益々彼れを憎んで終には彼を無きものにせんと計畫んだ。

シーライファス島からも其の外人の往んでゐる國からも遠く離れた沖のある岩の多い寂寥い荒れ果てた孤島にゴアモンと言つた三人の犖猛な姉妹が住んでゐた。この奇怪な姉妹の顔は婦人の様であつても其の外には婦人らしいことは毫もなかつた。煌々輝つた黄金色の羽のついた鷲の翼があつて眞鍮と鐵との鱗に眞鍮の爪と大きな牙とを備へてゐるので、その人面と對照して奇怪な相貌を呈してゐた。

取り分け犖猛なのは髪のある筈の頭には一面に毒蛇が絡まつてゐて兩つに裂けた舌をさし延べながら其の届くところに來るものは、何んにでも咬みつかうとしてゐるのである。姉のゴアモン二人は前も今も變らぬ犖猛な怪物であつたが、妹のミニエーデューサといつたのは曾て美しい婦人であつておのが髪を黒くて長いのを頗る誇つてゐたものであつた。この婦人の顔は美しかつたが其の心はゴアモンの心のやうであつたので、神々が其の所業の悪いのを罰せんため、長い黒髪を蛇々とした毒蛇に

（希臘神話）

變へ、其の顔を見るものが直と石に變つて了ふ程物凄なものとなし給ふた。斯くて
兩ゴアゴンの妹となつて共に歩み、共に住まねばならぬこととなつたばかりか人を
石に變へる力があるので中でも一番恐るべきものであつた。

さてポリデクチーズ王はゴアゴン姉妹のことを精しく聞き知つてゐたのでバアシ
ユースを無きものにするにはミーデユースの首を取りに遣るに勝つた上策はないと
決心した。夫れで一日王はバアシユースを召して、王は近き内に美姫ヒポダマイア
と結婚する積なれば引出物としてミーデユースの首を婚禮祝の席に齎せよ。若しこ
の首を齎さなかつたなら二度と足をシーライアス島に踏み入るゝなど告げた。し
て無慚にもダナエーを土牢に押籠めてバアシユースが首を携へ歸るまでは出てはな
らぬと云つた。

バアシユースはゴアゴンの居る島は何所にあるのか又如何にして見つけたものか
夫れすら分らなかつたが何んでも西の方の沖にあるのだと思つて遙に空と海と一つ

(希臘神話)

になつてゐる邊を眺めやりながら濱邊に立つてゐると不圖二人のものが傍の砂の上
に呑んでゐるのに氣がついた。一人は頗る身長の高い婦人で頭に兜を被り、小脇に
燈を光つた楯を掻い込み手に鎗を携へてゐた。今一人は年若き男であつて翼のつい
た帽子を被り、翼のついた履を穿き翼のついた杖を持ち焰のやうに輝いてゐる曲つた
劍を帯んでゐた。身長の高い婦人はミナーバ女神で若い男はマアキユリー神で自分
を助けたために現はれて來給ふたものとバアシユースは思つた。オリムパス山の神
々は勇猛果敢のものと視れば危急の場合に現はれいで、力を貸し給ふのが常であつ
たのでバアシユースも心の中に期待してゐたのであつた。

ミナーバ女神は先づゴアゴンの居る島の所在を知るの途を告げ給ふた。そはゴア
ゴンの従姉妹に當る三人の白髮婦人に問ふより外はないこれを措ては世界に誰とて
必要の通報をするものはないといふのであつた。次にゴアゴンに廻り會つた折に年
長のゴアゴン二人は不死の怪物なれば手を着けぬがよい。又正面にミーデユースを

(希臘神話)

見ればおのれが石に變るの恐れあれば決して見てはならぬと戒め給ひて、彼の光つた楯を取つて高く頭の上に捧げながら、濱邊にあつた貝殻や小石をその楯に映して、バアシユースに示しいざミーデューサの首を打ち落さうとする折にはその恐しい顔はこの楯に映つたのばかり見なければならぬと言つて楯をバアシユースに貸し與へ給ふた。

今度はマアキユリー神の順番であつた。マアキユリー神はその曲つた劔をバアシユースに貸し與へ給ふた。これは眞鍮、鐵その他どんな硬い物でも切れる鋭い劔であつてゴアゴンの鱗を切り徹せるのはこの劔ばかりであつた。次には朦朧國に住んでゐる三人の白髪婦人の住居に行く道を示し給ふた——この朦朧國といふのは海から昇る霧に遮蔽された邊にある陸地である。

マアキユリー神とバアシユースは直に出發した。遠く北の方へ進み行きて遂に寒くて霧の多い土地に着いた。彌々遠く行くほど霧は彌々深くなり、空間は彌々暗く

(希臘神話)

なつたが、遂に薄暗い光線の中に三人の老嫗が近寄つて來るのを微かに認めた。長い白髪は肩に垂れかゝつてゐた。衣服も顔も灰色であつた。眼が見えぬからして霧の中を手探りに歩いてゐた。三人は何か喧嘩してゐる様子であつたが、段々近寄つて見ると三人で一眼を流用するについて争つてゐるのであつた。三人で眼も一ツ齒も一ツしかないほどに老衰してゐたからであつた。

「そら速く速くバアシユースよ、汝が腕を試すは今だ。彼等が一眼を奪つて取れ、しかして彼等に迫つてゴアゴンの所在を探れ、彼等は決して自から進んでその所在を明すものではない」とマアキユリー神が宣ふた。

それでバアシユースは眼を奪つて白髪婦人等が此方の間に答へないうちは戻して遣らない、そこで白髪婦人等はゴアゴンの島の所在を知るには夜の女神の娘等のヘスペリデーイズに尋ねるより外はないと言つた。この女神等はヘスペリデーイズの園にある評判の高い黄金の林檎の番人であつたして此の園は巨人のアトラスが大空

(希臘神話)

を支へてゐる所の近邊にあつたのである。

それよりマアキユリー神とバアシユースとは再び出發した。此度は陸を越え海を渡り遠く西の方へ進んで遂にヘスペリデーズの園に到着した。

園の女神等はマアキユリーとバアシユースを深切に待遇した。兼てよりミーデーユーサを殺す豪傑の來るのを待つてゐたので喜んで助力をしようと思つた。その時既に地平線上に微に見えるゴアゴンの鳥をバアシユースに指さして示した。それから女神等は翼のついた一足の履を渡した。この履を穿いてゐるものにはバアキユリー神同様に速く空中を驅る力が備るのである。次に下界の王ブリユートーの所有した隱匿の胃を渡した。この胃を被つてゐれば人の目に留らぬのである。又次には魔法袋を渡した。この袋にミーデーユーサの首を入れれば無事に持ち運びが出来るのである。バアシユース今は全く身仕度が出来たので早速荒仕事に取掛らんと勇み立つた。ミナバーの光つた楯マアキユリーの曲つた劍、翼のある履、隱匿の兜、さては魔法

(希臘神話)

袋と捕つた上はゴアゴン如何に犇狂なりとも恐るゝに足らない、さざ一拉ぎにと息巻いた。

(希臘神話)

ゴアゴンが夜半寢入つてゐる折を待ち受けて鷲地にゴアゴン島に突き入り翻々と黄金の大鷹の如く中空を徘徊しながらミナバーの楯に満月の光を受けて怖ろしい光景を見た。ゴアゴンの三姉妹は案に違はず睡熟してゐた。その周圍には雜然と怪しげな褐色の岩のやうなものが見えだがその實、岩ではなくミーデーユーサの顔を見て石に變つた人や獸の遺骸であつた。

楯に眼を留めながらひらりと飛びおりて閃光一過の間にミーデーユーサの首を刎ね落して魔法袋に入れたまま翼のある履にて快走した。後に生き残つた姉妹のゴアゴンは眼を覺まして怖ろしい叫聲をあげて跳び掛つて來た。黄金の翼の羽撃つ音や眞鍮の爪のカタ／＼する響や頭の上の蛇のシユウシユウと呻る聲が聞えたが、その音も叫びもやがて消え失せた。ブリユートーの兜を被つてゐるので見えない敵を道に

トイフオンも遠く跡を追ふことが出来なかつたのだ。それでバアシユースはミトーデ
ユーサの首を携へて無事にその場を逃れ出た。

ミナーバ女神とマアキユリー神とはヘスペリデーズの園を出て以來其の姿は見
えなかつたが、始終バアシユースの身邊に付き纏つてゐ給ふた。ミナーバ女神はゴ
アゴンの鋭い叫聲を聞いてこれを楽器に吹き込んだ。その楽器は直とその場で出来
たもので大方ミーデューサの硬い鱗から取つた薄打の青銅で出来たものであつた。
この楽器は笛であつたといふ人が多いがミナトバは軍の女神であつたから軍用喇叭
の類であつたに違ひない。バアシユースは未だミナーバ神に楯を返しミーデューサ
の首を献せないうちに様々の冒険を遣つた。

その二。バアシユースとアンドロメダ

ゴアゴンの姉妹がバアシユースの跡を追ふことを思ひ止つた頃バアシユースは徐
々と履についでる黄金の翼で中空を翔つて足下の山々や河々を見下し如何なる國を

(希臘神話)

(希臘神話)

通過つてゐるのかと氣を配つた。山々の頂に日の出の紅い光を見て早や夜の明け
んとするのを知つた。俄然晴れわたつた空から雷鳴のやうな響が聞えた。その音は
多くの丘陵より反響したので何んだか人の聲のやうであつた。巨人の呻吟る聲のや
うに聞えた。その折バアシユースの眼に途微もない山が雲間に聳えてゐる様に見え
た。だが近寄つて見ると山と思つたのは途方もない無骨な巨人が頭と肩とで大空を
撐へながら立つてゐるのだと分つた。巨人の顔の周邊には自髪が垂れ掛つてゐて大
空の重量に堪えかねた様子であつた。その折大空は曙の光で黄色になつて法外に
大きな真鍮の椀を倒にしたやうに見えた。さてもあの傷はしい老巨人が大空の重量
に堪えかねて呻吟いたのも無理とはいへないバアシユースはこれを兼々噂に聞いた
巨人のアトラスに違ひないと思つた。

アトラスはバアシユースと聞いて胸を躍らしバアシユースも亦アトラスと聞いて
心を動かした。そはヘスペリデーズの園の番人でバアシユースに翼のある履と魔

法袋とを渡した。あの女神等はアトラスの姪であるので叔父のアトラスにバアシユースの身の上について一伍一什の物語をしたことであつたからである。双肩に大空の重荷を背負つてゐる。この惘然な巨人は硬い無感覺な岩になつて了ひたいといふので、あの不思議な作用をする首を一瞥見させて呉れといつた。さうなればいつまでも空を撐へてゐることも出来るし、又重いとも思はぬことにならうと考へた。それでアトラスはバアシユースに遇つた折一應の挨拶をした上でミーデューサの首を袋の中に携へてはゐないかと問ふた。携へてゐると言つたら、アトラスは見せて呉れといつた。此の首を一目でも見たら生きてゐるほどのものは皆石になつて了ふとバアシユースが巨人に戒めたがそれは素より願ふ所だと辯じたのでその首を一寸の間差し上げて見せた。

やがてシーライフアス島に向ふ途中でバアシユースは振向いて後を見た。今まで巨人の居たと思つた所に高い山があつて頂には雪、麓には林が見えたと確に思つた。

(希臘神話)

た。

次にバアシユースは日が燦々と熱い光線を放つてゐる沙漠の上を翔つた。ここには多数の醜い毒蛇が彼方にも此方にも這ふてゐるのが見えた。その折ミーデューサの首を入れてゐる袋から一滴の血が垂れて熱い砂の上に落ると前からゐたのと同じやうな蛇になつて暗い穴を探しに這ふて行くのを見た。直ぐ又一滴の血が落ちてこれも亦蛇になつたので今は外の蛇も皆斯んなにして出来たものだらうと分つた。この沙漠は今でも蛇の害を受けてゐるといふことだ。

これより漸く人の住んでゐる國々へ來たので一刻も早くシーライフアス島に着いて母を土牢より救ひ出したいと思つて彌高く昇り彌速く翔つた。

さてバアシユースのミーデューサ退治の少し前のことであつたが、シーフユース王の治むる某國にて恐ろしき海の怪物が沿岸に現はれるので、人民は大に恐怖してゐた。その怪物は翼が龍のやうで、尾は魚のやうで途方もない大きな鱗ある生物で

(希臘神話)

海蛇の種類らしいのであつた。漁夫の小供等が海邊に遊んでゐると一聲高く吼え、海より襲ひ來り小供を頸の間に銜へて引つ込んで了ふことが間々あつた。

人々は弓矢を持ち出してそれを射たが矢が硬い鱗から反彈されて空しく水中に落ちて了つた。此度は網を張つて捕へやうとしたが、怪物が絡まつたと思ふと網を噛み切つて尾で激しく打ち揮ひ遂に脱け出して網の斷片を背中に引き纏ふたまま逃げ去つて了つた。

偶一人の老僧が濱邊に集つた群集の中を押し分け進み出でこの怪物は定めて神々の内より遣はされたものに相違ないからこれと闘ふのは無用のことだといつた。シーフェース王にアンドロメダといへる一人の美しい娘があつた。王妃は海神ニレーアスの娘等より一際美しいといつて誇つてゐた。海神の娘は五十人あつて海中に住み折々は海豚に曳かせた車に乗つてゐるのが見えたが、いづれも美しい中でガラチーアといふのが一番美しいといふので評判が高かつた。

(希臘神話)

(希臘神話)

此の海の怪物を遣はしたのは海神ニレーアスに違ひないと老僧は思つたのでシーフェース王が娘のアンドロメダを汀の岩に鎖で繋いで怪物の餌食となるまでそこに打ち棄ておかねば怪物はよも退くまじといつた。

こは王と王妃の耳に入るには誠に怖ろしい言葉であつた。でアンドロメダを引つ込めて王宮の奥深くへ匿さうとしたが、人民がさうはさせないで宮門の内へ押寄せて來てアンドロメダを捕へ、鎖で縛つて大きな岩に結へ附けたので潮が満ちて來ると兩脚を打ち洗ふた。そんな所に打棄てておかれても母と王妃は救ひに來るのを憚つてゐた。

アンドロメダは何の因果でこんな惨い目に遭ふものかと訝つた。彼女は両手を鎖で縛られたままで立ちながら、海の怪物のことについて兼ねて噂に聞いた怖ろしい話の數々を心に思ひ浮べて顔の色は早や脚下に揚りそめた波が立つる泡のやうに白くなつた。彼女は頭を屈め見るも怖ろしいものを遮らんと眼を閉ぢた。涙は頬につ

たはつて水に落ちた。折しも頭の上に翼の羽撃つ音がしたので何か別段の危難が起つたものと覺悟して仰いては見たが何物も眼には留らなかつた。又翼の音が間近にして何かコトコトと岩を敲くやうな音がしたと思ふうちに不圖我が前に黄金髪青年が立つてゐるのを見た。此の青年は羽のついてる胃を手に持ち黄金の翼のある履を穿き何か重さうなものを入れてゐる獵囊のやうなものを肩に懸けてゐたことは言ふまでもなくバアシユースであつたが、アンドロメダは正面に空から降りて來た神に違ひないと思つた。岩に繋がれた譯をバアシユースに問はれて彼女は悦んで一伍一什を物語つた。

アンドロメダの話の最中にバアシユースが彼の曲つた劍の鋭い刃を驗してゐる間に噓れた咆哮の聲がして、海上に水煙がサツと打ち揚つた。バアシユースは急に重いミーデューサの首を袋から出して岩の上に置き、海草でよく包括めてそれより履の翼を擴げて雲の中に突進した。

(希臘神話)

此度は間近に噓れた咆哮の聲がしたと思ふとアンドロメダの眼に海の怪物が來るのが見えた。大きな蛇の様な頭を高く舉げて軍船のやうに水を切つて進んで來たのが見えたその折バアシユースは空から躍り降りて劍と楯を日光に閃めかしながら翻々と怪物の上を徘徊してゐた。怪物は水の面にバアシユースの影の映るのを視て猛然と咬み付いた。その機を外さずバアシユースは正面に躍り降りて海の怪物が振り向いて刃物のやうな鋭い歯で噛み裂かんとする間もあらせす欄も通れと怪物の肩先に曲つた劍を突き込んだ。怪物は怖ろしい咆哮の聲をあげて仰きに倒れて水の面に靜に浮んだ。アンドロメダは救はれた。

バアシユースは岩の上にあるアンドロメダの許に戻つて行つて彼の不思議な劍で造作もなく鎖を断ち切つた。それよりミーデューサの首を袋に入れようと拾ひ上げて見るとそれを包括めて置いた海草が硬い石に變つて首から滴つた血の様に赤くなつてゐた。海神ニールアスの娘等が濱邊に遊びに來て見ると奇異つた海草があつて

(希臘神話)

その種子が方々に散布つてゐた。漁夫等は海岸近くにある美しい珊瑚は此の種子から出来たものだと言へても信じてゐる。

その際王や王妃や人民等は海の怪物の咆哮の聲を聞きつけて濱邊に集つた。日頃怖ぢ恐れてゐた怪物が正しく死んでゐたのを見て思はず喝采の聲を揚げた。シープユース王は王女アンドロメダをバアシユースと結婚させて全王國を領さしめんと言つた。

人民等は直と婚禮祝の準備に取掛つた。町内の家々に花環を懸けた。香氣馥郁たる薫物を燃した笛を吹き琴を弾き、音樂の拍子につれて謠ふたり舞ふたりした。準備の整つた頃王宮の戸を開け放して貴族の面々が祝宴の席に案内された。

ここにシープユース王の領内に一人の貴族があつて他の貴族等とこの歡樂を共にするのを悦ばなかつた。それはファイニユースといつてアンドロメダと結婚の約束をしてゐたものであつた。彼はアンドロメダが鎖にて岩に繋がれ海の怪物の一回の朝

(希臘神話)

(希臘神話)

餐に充てられんとしたのを知りながらその折は餘所に見てゐたのであつたが今はおのが權利を言ひ張らんとしてゐた。それで家來の者共を召し集めて悉く武裝させ祝宴の酣ならんとする頃王宮内に押し入り、それより大食堂にまで闖入つた。ファイニユースは食堂に入りながら鬨の聲を揚げてバアシユースを目掛けて鎗を投げつけたが覘を誤つた。バアシユースは急に重い青銅の碗を食卓より掴み取つて投げ返したがファイニユースは祭壇の下に逃げ込んだ。

これより王の臣下等とファイニユースの家來共と入り亂れて闘ひ合ひ槍を抜くも女等は泣き叫びながら室から逃げ出した。ファイニユースの家來共は闘の名義が不正であつたに拘らず勝利はその手に落ちんとしてゐた。バアシユースは片隅に追ひ詰められ王の臣下は殆んど皆室外に追ひ捲られたその折にバアシユースは聲を張り擧げ「我に味方せんものあらば敵を驅退けよ」と呼はりながらミーデューサの首

を差し上げたと思ふうちにファイニユースとその家来共は皆凝固つて大理石の肖像
になつて了つたので今はバアシユース王も何の恐るべき者もないやうになつた。
シーフユース王はバアシユースのリビヤ（亞非利加大半の古名）に留まらんことを
望み好んでおのが王國の半分或は兼て言つた通りその全部をすら譲り與へやうと
したがバアシユースは切にシーフアス島に行かんことを望んだ。さればとて王
は一艘の船を兼ひ漕手を遣はした。人民は皆海岸に集ひ來て新夫婦のバアシユース
とアンドロメダに別を告げた。

その三。バアシユースの歸郷

バアシユースがミーデューサの首を齧らして歸つて來たとの評判が廣く傳つたの
でシーフアス島を擧つて歡喜の聲が揚つた。獨り悦ばなかつたのはポリデクテ
アイズ王であつた。けれども悦ぶ爲して盛宴を張つて伶人にダナエーの息の大勳功
の歌といふのを誦はせた。バアシユースとその母との敵は皆この饗宴の席に集つて

かたのでバアシユースはミーデューサの首をその面前に差し上げてポリデクテアイ
ズ初め其の他の敵を悉く石となつて果てしめた。バアシユースの不在中母のダナ
エーはポリデクテアイズ王に虐待されたが只一人の恩人があつた。それは王の弟で
漁夫のデイケチスが力の限りを盡してダナエーを助けて呉れたのであつた。バアシ
ユースは今國中で一番強い人となつておのが思ふまゝに振舞へるので離れ憚るこ
ともなくデイクチズを玉に取り立てた上で母とアンドロメダを伴ふておのが正當の
領國なるアアゴスに向け出帆した。バアシユースは祖父アクリシアス王の位を已れ
取て代るやうなことは欲しない。只王が未だ達者で生きてゐたなら彼の神託につい
ての懸念を忘れて了つて久しい前に眞鍮金具を打つた櫃の中に入れて海に流した。
その娘と孫とに面會するのを喜んで呉れ、ば好いがと思つた。
さる程にバアシユースが手柄功名の評判が近隣の國々まで傳はつて家々の爐邊は
その勳功談で持ち切つてゐた。この豪傑が間もなく遣つて來るといふので人民は熱

狂した。バアシユースの船がまたアアゴスに着かない前からアクリシアス王は孫の歸つて来るのを聞き込んでゐた。この取沙汰の耳に入るのを喜びはせないで却つて怖ぢ込んでゐた。おのれは孫の爲に殺さるべしとの神託があつたのをよく記憶してゐるからである。王はアアゴスに留つて居るさへ好まないで夜に紛れてテッサリ州のラリツサ市に出奔して了つた。

こゝにバアシユースの乗つてゐる船は風波のために稍針路が外れて思はぬラリツサにアグリシアス王が着いて後間もなく着いた。着いて見るとラリツサの市民は例年の競技會を催してゐたので市民はアクリシアス王の許を得て、その競技に加らんことをバアシユースに乞ふた。王は孫に邂逅ふことを欲しなかつたが、観客の間に交つて見物してゐた。バアシユースが膂力の妙技或は手練の早業を行へば頻りと喝采の聲が揚るのでアクリシアス王はおのが孫のため得意の氣色を隠すことは出来なかつた。

(希臘神話)

當日の競技を終るに臨み青年等が投石の競争を行つたがバアシユースの投げたのは空前の上出来であつた。熱狂せる市民の所望に應じて第二回のを投げた。見事な半圓形を描いて高く空に舞ひあがつたが降り際になつて俄に海から一陣の狂風が起つて一方にその石を吹き寄せたと思ふ間もなく観客の中に落ちアクリシアス王を打つて立所に王を殺した。

(希臘神話)

バアシユースは人々の叫び聲が聞えたので誰れか死んだものとは思つたが、豈圖らんその死んだのはこのラリツサに来て居ようとは今が今まで夢にも思はなかつた祖父のアクシリアス王だと聞いて一方ならず驚き悶へた。

かくて神託の言葉は空しからぬことゝなつた。バアシユースは到頭アアゴスに歸りて祖父の位を繼いで國を治め賢明で公平で深く人民に敬愛せられた。

◎アラクネ

アラクネは地中海の沿岸の一小村に住んでゐた。父母は貧しくあつた。母は家族のため質素な食事を料理したり畑に出て働いたり忙しくしてゐる間にアラクネは終日糸を紡ぐのを常としてゐた。

紡車は昆蟲の唸つてゐるやうに噪がしく絶えず旋轉してゐた。油断なく骨折るの彼女が紡いだ糸はその邊の海から立ち昇る霧のやうに細微かつたほど上手になつた。隣り近所のもものは斯んな細い糸は役に立たないそれよりか糸を紡ぐ手間を省いてもつと母の手助けをしたが好いなど噂することもあるほどであつた。

アラクネの父は漁夫であるので一日のこと紅や紫のつやくした色の小さい介類の一杯入つた籠を提げて家に戻つて來た。父は介の色が餘りに奇麗なのでこれでアラクネの糸を染めて見やうと思つて験したところが此れまで見た織物の中にはこんな鮮やかな色のものはないほどの上出来であつた——後の世にタイル(國の名)紫といつたのはあれである——又諸國の王様がその色の服を身に着けるのを好ん

(希臘神話)

だので王の紫と言ふものもあつた。これよりアラクネの掛毛氈といへばその染色の新柄を愛づるものが多くなつて賣れ行々もよく早や世間の評判ものとなつた。アラクネの家族はこれまでの小さな草舎を立ち退いて大きな家に住み替へた。母は畑に出で働かないでもよいやうになつた。父は舟に乗りいで魚を捕らないでもよいやうになつた。

(希臘神話)

アラクネの名は掛毛氈の評判と共に高くなつた。稱讚の言葉が方々から聞えたので少々自滿の氣が出たのは彼女の爲め惜むべきである。人々が小さな貝で製した染色の美しいのを褒め稱ふればアラクネはその名望を自分のものにし父の助力に依つたことは人に話さなかつた。

アラクネが機を織つてゐると大勢のものが機の背後に立つて模様繪の出で來るのに見落れてゐることが間々あつたが一日のこと誰かの口から紡織の女神ミナーバですらこの漁夫の娘が織るのよりもつと奇麗な掛毛氈を織ることは出来まいと言ふの

が不圖耳に入つた。

こは取るにも足りない痴の言なれどもアラクネはそを眞のことと思つた。又一人のものが斯んなに立派に織るからには何んでもミナーバ女神の直傳を受けたものに違ひあるまいと言ふのを聞いた。

さて實を言つたらアラクネに教へたのはミナーバ女神であつた。沿岸に小さな貝類を贈つたのも女神であつた。女神は姿こそ現はし給はねど娘の背後に立つて梭を導いたことも間があつた。

だがアラクネの眼には女神の姿が見えなしたので何も自力でするものと心得てその妙手を誇り始めた。一日人に語つて『私はミナーバ女神より上手でないまでも同等位には織れますのださうです。で私は女神と腕試が致して見たい、さうしましたなら何方が上手か分りますませう』といつた。

斯んな不淨の言葉がアラクネの口より漏れたかと思ふ間に床の上に畳木杖の音が

(希臘神話)

(希臘神話)

聞えた。振り向いて見るとアラクネの眼に古惚けた灰色の外套を着てゐる弱々しい老嫗が見えた。老嫗の眼はその外套のやうに灰色でこんな老人にしては珍らしく光輝つて分明としてゐた。重く畳木杖に倚り絶つて物を言ふときに聲は斷續れて力なげにあつた。

老嫗は言つた『私は汝より餘程年上です、私の忠告をお聴きなさい。汝はミナーバ女神に對して恩知らずの言葉を放ちました。女神のお宥恕を乞ふたがよい。汝が眞に悔悟したなら女神はお容赦になりませう』

さてアラクネは老人を尊敬する風がなかつた古惚けた外套でも着てゐると取り分けさうであつた。

アラクネは『私にご忠告はご無用です、それよりかご自分のお子達らに忠告なさるがよい。私は私の言いたいことを言ひ、し度いことをします』と言つた。

これにて老嫗の白い眼に怒氣が閃いた。畳木杖はいつの間にか輝つた鎗に變つて

めた。外套が脱げたと思ふとミナーバ女神が正しく立つてゐた。

アラクネの顔は赤くなつたり白くなつたりしたがそれでさへ女神の宥怒を乞ふことをせないで織競をして見たいと言つてゐた。

それで二臺の機が持ち込まれて頭の上の梁に取り附けられた。上でミナーバと痴なアラクネとが立ち並んで銘々に掛毛氈を織り始めた。

ミナーバの織つた毛氈にはアラクネのやうに狂愚で高慢で神々に罰せられた人間の繪模様が出て来た。そはアラクネに對する深切な戒めになるのであつた。

だがアラクネはこの戒に心を留める氣がなくて掛毛氈の繪模様にもオムムパス山の神々の痴がましき仕業など織り出した。

こは如何にも不敬の振舞であつてアラクネの毛氈が仕上つたのを見て女神が寸すに引き裂き給ふたのは當然のことである。

アラクネは今になつて怖ぢ恐れても追つ付かないミナーバは突然校にてアラクネ

(希臘神話)

の額を打ち給へは彼女は拇指にも足りないほどの小さな生物に縮まつて了つた。

「汝は斯くまで紡ぐことと織ることに巧妙だと自滿してゐるからには紡ぐことと織ることより外には汝が生涯に何事をもなさぬがよいぞ」と女神が宣ふた。

斯くてアラクネはこんな見窄らしい姿となつてこそくと薄暗い隅に逃げ込んだ。今は是非なく極めて細い網を紡いでそれで父が魚を捕つた様に蠅を捕つて命を繋いで行かねばならぬこととなつた。彼女は紡手と呼ばれた。

此の小さな初代の紡手の子孫が頗る殖えて来て紡手の舊名が變じて蜘蛛となつた。アラクネの織物のやうに霧に似た細い蜘蛛の網が天氣の晴れ際なつた。朝の間一面に草を覆ふてゐることが間々ある。

(希臘神話)

◎ジューソンと黄金の羊毛

その一 片足に履を穿いた人

ジエーンソンといふはイーソン王の息で父のアイオルカス王國の相續人であつた。一日ジエーンソンのまだ搖籃にゐる頑是ない嬰兒の時分にピーリアスと言つた強い酋長が大勢の武装して軍隊を率ゐて王宮を襲ひ宮門を突き破つて入りイーソン王を囚へ去つた。

この騒動に紛れてジエーンソンの保母はおのが委托つた嬰兒を抱いで逃げ出し、寂しい路を通り沼を涉り山を越えキロンの洞に難を避けた。

キロンといふは半人半馬の怪物であつた。彼が体と脚は馬で頭と肩は人で當時の貧民のやうに洞に住まつてゐて一種の學校を設けてゐた。生徒は老練の騎兵となり巧妙な音楽家となつた。森林に入り野獸を狩して鎗や楯やその他の武器の使ひ方を覺えた。キロンの學校は粗暴な學校であつたが勇武の人々が出た。

保母がジエーンソンをキロンの洞に連れて行つた時キロンの妻はこの兒を預つて生長の上キロンの教育を受け得らるゝまで我が子の様に世話した。

(希臘神話)

さるほどにピーリアスはアイオルカス國を支配し正當の王のイーソンは牢屋の中に瘦せ衰へてゐた。だが押領者のピーリアスの世は太平ではなかつた。人民の間には何日か正當の王が位に復するだらうとの説が行はれてゐた。又一種の豫言が廣く傳つてピーリアス王を戒め片足に履を穿いた人が山より降りて来る日が来るだらうと用心させてゐた。

ジエーンソンが二十歳になつた時は希臘の國にて誰にも劣らぬ發育の完全で立派な青年であつた。長い多やかな髪は廣い肩の上に垂れてゐて若い獅子のやうにツツシリと強げな歩きつきであつた。

今は我が腕前を試すべき年輩になつたのでジエーンソンは一日良師のキロンに別を告げ、肩には豹の皮を投げ掛け兩の手に鎗を持つて派手々々しくアイオルカスへ向け發足した。ピーリアスの手より我が王國を取り戻さんと志したのであつた。山を降る途中で酷く水嵩の増してゐた。川に來たがその川岸に一人の老媪が渡り

(希臘神話)

兼ねて困つてゐるのを見て深切にも渡してあげやうと言つたら老媪はお頼みする。といつた。老媪は體も小さく瘦せてもゐるので背負ふにも輕からうと思つたがさて川に這入つてみると中々重い。で流に溯ると同時に重荷に堪えやうと努むる機に川底の泥の中に片足の履を踏み外して了つたが、漸く向ふ岸に達することが出来て老媪を無事に其所へおろした。その折初めて自分が今川を渡したのは女神のジーノであつたと聞いてジーノンは我れ知らず驚いた。これよりジーノ女神はジーノンの友となつた。

ジーノンがアイオルカスの公會園に歩を進めた折人民は神の臨み給へるものと思つてこはアポロ神ではあるまいか、マーズ神ではあるまいかと訝つた。だがピーリアス王は彼の豫言のことを思ひ出しながらジーノンの脚もとをちらと見て履を片足しか窄いてゐないのに氣がついたので酷く落膽しながらその名を問ふた。ジーノンは明白に名告つてキロンの洞で人と成つたことをも告げた。この評判

は早や町中に傳はりジーノンの親族のイーオラスの息等が聞きつけて吾が家に歡迎した。

ジーノンは五日程アイオルカスに逗留した上で親族一同を呼び集めて押領者のピーリアスと人民等の面前にて王位に對する要求を述べた。元來ジーノンとピーリアスとは同族であつたので相戦つて血を流すのは正義でない。とジーノンは思つた。それでピーリアスに正當に我が所有に屬する廣い土地と多くの羊や野獸を與へんことを約したが、王位王權は我れ自から有さねばならぬと言つた。

ピーリアスはジーノンの要求に對して怒つた様子は見せなかつたが早くもこの豪傑を再び追ひ返さうと工夫を凝らした。ジーノンの着する數日前の夜奇異な夢を見た。とピーリアスが言つたがその夢の中に聲があつて「汝コルキス國に行つてフリクサスを海を渡りコルキス國へ連れていつたあの牡羊の黄金の毛を取戻て來いと命じた。

フリクサスの話はジエーン初めアイオルカスの人民は皆よく聞き知つてゐた。多く年を経た昔の事であつたが、フリクサスとヘリーといつたホルラス族の二人の小供が繼母に虐待されたので黄金の毛の牡羊に助けられてアイオルカスを逃げ出した。羊は二人の小供を背負つて海を渡りホルクス王国に遊き着いた。途中の波の荒い所でヘリーは海に落ちて溺れて了つたがフリクサスは睨と羊の毛に掴つて無事にホルクスに着いた。羊は犠牲としてジエービターの神壇に供へられたのでフリクサスはその美しい黄金の毛をホルクス王に献じたれば王はマーズの園にある大きな樺の木にその毛を釘附けにした。こんな事であつたのは古い昔の事であつたのでアイオルカスの人民はフリクサスのヘリーだのいふ小供が居たことすら今は殆んど忘れて了つてゐたが親達の話で不思議な黄金の羊毛の事は覚えてゐてその羊毛はいづれアイオルカス國に取り戻さるるものと思つてゐた。

ピリアス王はこの夢の事を語つた上で「余は夢の中に聞いた聲に従ふより外は

(希臘神話)

(希臘神話)

ない。が余は進々寄る年波に斯る冒険を試みやうなどいふ元氣は思ひも寄らぬ。ジエーンよ御身は年若くて強健なり余に代つて行つては呉れまいか、御身若し首尾よくこれを成し遂げてアイオルカスに王たるべき腕前を見せなば御身は父の王冠と玉位を有すべし」といつた。

ピリアスの左右に待つてゐた會長等は皆これを公平な計ひと思つて青年の勇氣は證明されたがよい。ジエーンが眞に王たるに適するのなら金毛を取り戻して來らるゝだらうといつた。されどジエーン叔父や従兄弟等は前途の危険を思ふてこの事に當らんとならばジエーン一人にて敵地に踏み込むのはよくないと云つた。

ピリアス王は傳令使に命じて喇叭を携へ公會園に行き此度の遠征のことを廣く人民に告げ知らせジエーン金の毛探索に同行したいといふ有志者を募れといつた。

この召集に應じて勇敢なる青年等が希臘の各方面より出揃つた。中には既に名を知られた勇士もゐたが大抵は後になつて名が揚つたのである。有志者の中にはカストアとポラックス兄弟やヘアキユリスや不思議な詩人たり音楽家たるオアフニスやメリーエージャーヤ父と同様に紫の翼あるポーレアスの二人の息やマーキユリー神の二人の息やヤドミータス王やジエーンンの従兄弟達やビリアス王の息さへも加つてゐた。

希臘の酋長等は、この勇士等のためこれ迄に類のない大きな船を造らせた。六十挺の櫂を装ふた帆前船といふのであつた。この大船を造る木材になる樹はまだ山林の中に立つてゐるのだから勇士等が遠征の準備をしたり朋友に別れを告ぐるの餘裕は十分にあつた。

その二 金羊毛探索隊の航海

新造船アアゴの艦装が出来たので勇士等が乗り込んで櫂を取つた。ジエーンン

（希臘神話）

（希臘神話）

は艦に立ちながらジエービター神に祈禱した祈禱を了ると黄金の蓋から蜜酒を海中に投げた。それよりオアフニスと琴を弾き勇士は皆手を揃へこの音楽に拍子を合せて漕ぎ出した。アアゴ船が徐々と港を出たれば南方より輕風吹き來つて帆を孕ませた。海岸に見物しながら立つてゐた人民の群集は皆これを吉兆と思つた。

此の頃にては遠く大海に航する者は不思議な怪物や不測の奇禍に遭ふてその膽を寒からしむることが尠くないのであつた。探索隊のまだ遠くも航さぬうちにヘアビズといふ怪物が海に突出した岬に多數駈々と徘徊してゐるのを見た。ヘアビズは婦人の顔つきした大鷲のやうな怪鳥であつた。

探索隊が岬に近寄つて來たらこの怖ろしいヘアビズが自分の園内の林の中に坐つてゐた盲目の老人を惱ましてゐるのが分つた。次にその老人は頭に冠を戴いてゐるので王であらうといふことと前に小さな卓を据えて朝飯を食へやうとしてゐたことが分つた。王が一瞬の食物を口へ入れやうとする途端に一羽の怪鳥が兩翼を羽撃

ちて下り來りその食物を握へ去つて了ふのである。

ポーレアスの二人の息子が老いたる王のため氣の毒に思つて怪鳥の翼よりも大きくて強い紫の翼を張つて船から駆け出し怪鳥を逐ひまくり山々の向ふまでも追ひ詰めた。

その名をファイニウースといつた盲目の老王はポーレアスの二人の息の振舞を深く徳としてアアゴ一船の一行は何所へ向ふのかと問ふた。金羊毛の探索にヨルキスに行くのだと聞いて二つの巨巖シムブンガダイズを無事に通り越す工夫を教へて呉れた。この巨巖は黒海の入りにあるのでアアゴ一船は是非ともこの難所を通らねばならぬのである。

これ迄シムブンガダイズに應潰された船の数は幾許あつたか知れないほどである。船はいふまでもなくその他何にても動いてるものがこの兩巖の間を通ると巖はその基底の上に旋轉つてどんな物でも粉微塵に砕いて了ふほどの力で轟々と凄じ

をさせて摩合ふやうな悪戯をするのであつた。斯んな災難に罹らないやうにファイニウース王が一行に告げて先づ一羽の鳩を巖と巖との間の狭い通路に放ちやつて兩巖が閉ぢ塞いだ後再び振り開かんとする途端に全速力を出して二回目に閉ぢる前にアアゴ一船を漕ぎ切つたがよいといつた。

翌日アアゴ一船はシムブンガダイズに達した。巖は二基の堅固な塔の様に海から屹立つてゐた。ジェーンソンはファイニウース王の忠告に従つて兩巖の間に鳩を放つた。兩巖は轟然雷鳴のやうに響いて相觸れ徐々と元の位置に動き始めた。迅速くアトゴ一は通り抜けたが、舵が巖の間を通り越さないうちに再び轟然相觸れたので中に狭まり粉微塵に砕けた。勇士等は皆危き難を遁れて臍を寒からしめ全速力を出してこの無惨なる巖から船を漕ぎ抜けた。

危険を切り抜けた上でジェーンソンは鳩の悪運を感然に思つてゐるうち空から羽撃ちしながら降りて來て鳩々と鳴き尾を振つたり擴げたりしてジェーンソンの肩に止ま

リアアゴーの乗組員を救つたのを知つてゐるかの様に嬉しげなさまであつた。その白い翼は巖に打たれるほど鈍くはなかつたのである。

これより後はシムブレガデイズ巖は又と船を打ち砕くことはなかつたその折り非常な力で兩巖が觸れ合つたので又と離れることが出来なくなつて一巖となつて了つたからである。

探索隊は尙遠く航して多くの奇怪なる物を見た。一日ステムフエーリアン鳥といふ猛烈な鳥が翼を搦へてゐるマーズ島を通過つてここに難船の厄に遭つたフリアサスの二人の息に邂逅つたので二人を船中に連れて来て衣食を宛行つた。二人の話にてコルキス王エーチーズの殘忍無道で恐るべきものだといふことと金羊毛の極めて怖ろしい龍に守られてゐることを知つた。一行は間もなくニルキスに着いた。夜間に入港して樹や灌木の生ひ茂つてゐる人の目に留らない邊にリアアゴー船の碇を下した。

その三。金羊毛を手に入れる

翌日勇士等と相談した上にてシエトソンは直にエーチーズ王の許に行き遙々來た使命の次第を王に告げた。

「噫、それで汝は金羊毛を携へ歸りたいとな、宜しい持つて歸れよ。汝は歓迎せられん、だが先づ余がために一二の小事を爲さんことを汝は否まざるべし。余が牡牛を牽ぎに繋ぎてマーズの野の數エーカー(二百六十一町余)を耕した上余が汝に與ふる龍の齒若干を蒔け、此の龍の齒はカドマスの殺した龍の齒で軍神マーズより余に贈られたものである」とエーチーズ王が言つた。

王の言葉は如何にも懇懇であつたがその音聲のうちには嘲弄の意が潜んでゐた。この王の習慣として領國の海濱に上陸した他郷人を皆犠牲として神々に捧ぐることを家畜や羊でも犠牲にすると同じやうに思つてゐるといふことを一行の中には暗に聞いた覺えがあるものがあつた。

王の息女ミーディアはジエーンソンの謁見せる際その傍に立つてゐたがこの勇士の美貌を見て息女の黒い眼が燦めいた。ミーディアは評判の高い女魔術者オアシの姪であつて伯母から藥草や毒草の使用法を授かつた。又符呪や魔術をも覺えて父の王宮に秘密の室があつて奇怪げな混和劑の一杯入つてゐる藥罐がいつも沸騰してゐた又そこには一羽の鳥が栖んでゐて大きな黄色い眼で薄暗い室の隅から瞳つてゐた。

エーチーズ王は今おのが手に落ちた探察隊の一行を如何に處置する心底でゐたかは誰れも知らなかつたが兎も角數日の間は一行を款待した。

此の折ミーディアはジエーンソンの唯一人である虚を狙ふて彼の藥罐の中で製した強烈い膏油とリージュ河の岸から持つて來た一輪の紫色の花とを與へた。

ジエーンソンがミーディアから此の贈物を受けた。その當日にエーチーズ王はマーズの野に催せる競技會に一行を招待しやうと申し出でた。數回の競走があつた後、

(希臘神話)

(希臘神話)

王はジエーンソンにさアあの牡牛で一エーカーの地を耕した上にて龍の齒を蒔くべしこれが出來たなら樹にかけてある金羊毛を取つてアイオルカスに持ち歸つてもよいと云つた。

それよりエーチーズ王は奴隸の手も借らず數頭の牡牛を引き出した。この牡牛は猛激で手馴し難く誰れ一人手だに觸れ得ぬからである。いづれも莊嚴な動物であつて人を殺さうと思へば殺すほどの力があつた。白い角には尖つた鋼の鋒が付いてあつて堅牢な眞鍮の蹄で敷石の並んでゐる道にカラ／＼と大きな音をさせながら牛舎から引き出された。エーチーズ王には温順であつたが牡牛の目色には危険の兆があつた。

王は牡牛を羣に繋いだ上で一畦だけ耕したがその畦は長くて眞直で深いので畑が二分された様に見えた。それが済むと牡牛の頸から轆を外して放ち遣つた。

此度はジエーンソンの順番であつた。二頭の牡牛は野の遠き端で草を食ひ始めてゐ

た。ジエーンソンが近寄つて住つたら皆その頭をあげて鼻息したときには一陣の爛々たる火花が鼻孔から漏れ出てゐた。それより牡牛は猛烈に吼えて真餘の蹄で土地を爬き始めた。その周辺の草に火が附いた。

コルキスの人民はジエーンソンが斯んな怖ろしい生物に近寄つて行くのを見て驚いたが、何が保護を受けてゐたとは知らなかつた。實をいへばジエーンソンはミーデアから貰つた魔法草で製した膏油を頭から足まで塗付けてゐた。それで飛び散つて来る火花が中つても火傷することはなかつた。彼は平氣で激怒つてゐる動物の方に歩を進めてその頸に鞭を附けた。

牡牛の激怒はジエーンソンの恐れてゐないのを見ると鎮つて穏順しく犂に繋がつた。それでジエーンソンは約束通り地を耕してエーチーズ王のしたのと同様に真直で深い畦を作つた。

エーチーズ王は瞳若かへつてジエーンソンの耕してゐるのを見つめてゐた。これは

(番 神 話)

(番 神 話)

案外のことであつた。ジエーンソンが恐にも斯んな仕事をしたなら黙然ながら直に叩殺されて了ふだらうと思つてゐたのであつた。

だが龍の齒はまだ蒔かれなかつた。やがて王は若干の龍の齒を取り出しながら、「さあこれからが觀物だ」と呟いた。

ジエーンソンは暫時も躊躇はずその齒を取つて畦に蒔いた上で深く土を被せた。ジエーンソンは豫てカドマスと龍の齒の話を聞いて半は疑つてゐたが、齒は現に芽を出して生長したのはカドマスの時と同様であつた。先づ鋼の鎗尖が二三本土を衝通して出た。次に耕した地面の上の土が持ち擧つて來てジエーンソンの氣付かぬ間に皆武装して頗る猛烈な風采の武者が幾列にも立ち並んでゐた。その武者はジエーンソンを見ながら大きな叫び聲を揚げて手々に鎗を振り上げて撃つてかゝらうとした途端にジエーンソンは武者共の間に大石を投げつけた。その時武者は名々に兄弟等に撃れたもので同士打を始めて到頭皆殺されて了つた。最後に残つた武者が斃れた折に探

索隊の一行は隊長たるジェーンソンの爲め高く喝采の聲を揚げて花環を携へ來てその頭上に冠らせた。こは勇士が武技に勝つたときに行ふ習慣であつた。

エーチーズ王も今はジェーンソンに金羊毛を取る權利を拒むことが出来なかつたがジェーンソンには金羊毛を守つてゐる龍に勝つことは出来まいと私かに思つた。

金羊毛の懸つてゐるマーズの林はマーズの園の内にあつた。その園に入るには二つの高い巖の間に狭い谷を通らなければならなかつた。巖の間には急流があつて金羊毛の龍が折々通路を守るために此の急流に居ることもあつた。又時には金羊毛の懸つてゐる樺の木の上に龍が捲き附てゐることもあつた。龍は常にこの園の内の何所かゝつて屹度眠らずに番をしてゐた。ジェーンソンがマーズの園に達せないうちに日が暮れて月は東にさし昇り銀色の光を山河草木に浴せかけてゐた。ジェーンソンは闇夜でないのを見て喜んだ。二つの高い巖の間の急流に來た折に凝と龍を見探つた。がそこには居なかつた。それより多少の困難を経て急流の傍の狭い路に沿ふて登つ

て行つてさて此の度は谷に降りた。

マーズの園は儘に美しい園ではなかつた。物皆一種の毒物の害に罹つたやうに見えた。土地には草が生えないで端の尖つた危げな褐色の禿巖だらけであつた。樹木は葉をもつ力がなくなつて棘ばかり附いてゐたやうであつた。枝は最も奇怪な形に扭れてゐた。

ジェーンソンは素早く金羊毛を見た。壯麗なものであつて荒冷じき園内に一點の光輝を放つてゐた。

金羊毛は巨大な樺の木の下に懸つてゐて光輝を放散してゐるやうであつた。そして龍は樺の大きな幹に捲き附いてゐた。斑紋があり汚染があつて鋭く尖つて猛烈しげな飾冠を頭に戴いて頗る猛惡な状をしてゐた。

ジェーンソンが樺の木に近寄つたら龍は飾冠をあげて高く吼え叫んだのでその音はユルキスまでも聞えたほどであつた。だがジェーンソンはミイディアがリージー河の

岸で摘み取つて呉れた紫の花を確と手に握つて腕をさし延べ此の花を龍の前に突き出して、龍が花の匂を嗅いだと思ふと直に頭を垂れ飾冠を低れ猛き眼を閉ぢて寝入つて仕舞つた。

それよりジエーンソンは美しい金毛羊を解の木から拗り取つて探索隊の一行の許に到り龍や火を吹き出す牡牛に打ち勝つて渴望した金毛羊を手に入れたことを告げた一行は夜の明けない間にアアゴー船に乗り込んで故郷に出帆しやうと一決た。

勇士等がアアゴーを獲つてゐた折にミーディアは王宮を脱け出して一行に加つた。

翌朝旭の昇つた頃には沖に乗り出してゐた。探索隊は金毛羊を取つて去つたミーディアは一行と共に去つたといふ報知がアーチーズ王の許に來た。王は大勢の武装した一隊を率ゐて海岸に下り數隻の軍船を遣つてアアゴーの跡を追はせたがアアゴー船はコルキスの船を遺後に残して間もなく見えなくなつた。跡に残つた王は怒

(希臘神話)

(希臘神話)

かの眼を睜りながらコルキスの濱邊に立つてゐた。

勇士等は無事にアイオルカスに着したさてジエーンソンは押領者のピーリアス王に代つて長く幸福に國を治めた。

◎ハイラス

ジエーンソンが金毛羊の探索に遠く航した折に同行した勇士の一人にハークリーズといふがあつた。その時ハークリーズは扈從としてハイラスといつた美しい少年をアアゴー船に引き連れた。彼は殊の外この少年を愛した。黄金のレースの附いた緑色の服を着させて終日側に引き附けて置いて弓矢の使ひ方や石投や其外自分が父やシテローン山の牧者から習つた種々の技を教へてゐた。

探索隊が南風を帆に孕ませて三日の間航した後にはブローポンテスと言つた海に來て風が凪いだので一行はアアゴー船を濱邊に寄せて上陸した。その上陸したところ

に鹽分を含んだ草原があつて様々な色の美しい花が一面に咲いてゐた。一行は長い蘆や花菖蒲の花の咲いてゐるのや、其他種々の花を取り集め別に沼地の植物をも取り交せて冷しげな樹蔭の下に安樂な寢床を造つてここに數時間眠らうとした。日中の炎熱では船を漕いでも格別前進は出来まいと思つたからである。

夜に入つて一行は夕飯を食へ始めたハイラスは水注子を持つてパークリーズの爲めに水を汲みに出たが低い沼地の中に池ほどもある清水の出る泉を見つけた。燈心草や其他の美しい草がその周りに生えてゐた。羊齒類が水の縁に垂れかゝつてゐた乳草の一種がその白い花で邊りの空気を香ばしくしてゐた。如何にも美しい泉であつて水の神達が我が物としてゐた。この泉の底深くに住まつてゐて折々浮み出でては月の光を浴びて花の間に舞踏するのを日頃の習ひとしてゐた。

ハイラスは水の神達の事は毫も知らなかつたが水の邊に立つて水注子に水を入れかけた折に聲を揃へて「お出で、お出で」といふのが耳に入つた。水の神達はハイ

(希臘神話)

ラスを見てその美しい顔と黄金のレースとを歎美した。

ハイラスは泉を見つめて何の聲であつたのか、何の譯なのか怪んでゐるうちに二ツの細い白い手が突然黒い水から出てハイラスを引き込んで了つた。

日が暮れかかつて來てもハイラスが戻つて來なかつたのでパークリーズは少年の身に何か災難でも起つたものと心配しながら片手に楫棒を携へ他の手に弓を持つてハイラスを探しに出掛けた。ハイラスの行つた方面を追つて内地に踏み入り高く聲を張りあげながら「ハイラスや、ハイラスや」と呼ばはつた。丘陵からも「ハイラスや、ハイラスや」といふ呼び聲が反響して來た。パークリーズが水神の泉に近寄つたまでに得た返答はこれだけであつた。その折ハイラスの聲で徹かに答へてゐるのが聞えたと思つたが遠い遠い所から來るやうに覺えたので扈從の少年が黒い水の底に入つてゐやうとは思はなかつた。それで當所もなく棘茂の間を突き切つて進んで行つた。夜半に輕風が吹き起つた。それで探索隊は葦の臥床を出で船の帆

(希臘神話)

を揚げて出帆の用意はしたがさてハークリーズは何所に行つたか。勇士等は久しい間待ち受けた上で彼は出奔して了つて、ホルキスに同行する積がないものと看做し、碇を引き上げ歸路に就いた。

ハークリーズは三日の間丘陵から丘陵へと徘徊し、沼地の隈々まで搜索して幾度か微かな聲で呼ばば答へるのを聞いたが何所からその聲が來るのか分らなかつたので、こは自分の空想であつたに違ひないと思ひ定めて終に搜索を中止して徒歩でホルキスに向つた。

ハイレスはハークリーズが去つたとは知らないので、「ハークリーズよ、ハークリーズよ私は此所に居ます」と續げざまに呼ばはつた。そこを通りかかつた數人の農夫がその聲を聞いたがハークリーズと同様で何所からその聲が來るのか分らなかつた。尙その聲は幾夜も幾夜も夜を徹して「ハークリーズよハークリーズよ」と呼ばはつた。

(希臘神話)

その後暫くあつてこの農夫の一人が直に止つてゐる長さ一二寸に過ぎない小さな生物に目をつけたが丁度行方が知れなくなつた。扈從のやうに黄金のレースの附いてゐる緑の衣服を着てゐて體の小さい割には聲が大きかつた。その農夫が凝視ながら立つてゐる間も喉を脈らして聲を張り揚げ呼ばはつたが「フリープ、フリープ、フリープ」としか言へなかつた。

(希臘神話)

◎プロクネとフィロミーラ

パンダイオン王にプロクネといひフィロミーラといつた二人の美しい王女があつた。姉のプロクネは殘忍な軍神マーズの息のテリユースと結婚することとなつた。婚禮の祝宴が二週間以上も續いて唱歌、舞踏その他色々の遊嬉會が催された。だが結婚の神のハイメンは例の松明を把つて來客のうちに出席しては居なかつた。又グレーセスといつた美しい三女神もその席に見えなかつた。こは新婦の非運を示

すもので不吉の兆であつた。尙一羽の梟が遶入つて来て頭の上の棚に飛んで悲しげに鳴き始めたのはもつと不吉であつた。

プロクネは數年嫁してゐた後スレースの王宮にゐるのが淋しくて堪えきれなくなつたのでテリリュース王に乞ふて里方に歸らして貰ふかさなくば妹のフィロミーラを呼び迎へて貰ひたいといつた。

王は妹を呼んだがよいといつて一隻の船を賤はせ自身フィロミーラを迎ひに出かけた。

パンダイオン王は殘つた一人の妹娘に別れるのを惜んだがフィロミーラは姉に遇ひたうてならないので父の頸に縋りついて慰めつ賺しつ行かしてよと請ふので到頭父はしぶしぶ許を與へた。

さてもフィロミーラの爲め傷はしいことにはテリリュース王はいかにも殘忍無道の人であつた。妹の美しいのを見てプロクネに代へ妹の方に結婚したくなつた。船

(希臘神話)

(希臘神話)

がスレースに着くと直にテリリュース王はプロクネを大きな森の中に放逐して淋しい塔の内に押込めた上で歎いたり呻いたりしてフィロミーラに姉は死んだと告げた。フィロミーラは鷹を断たるる思をして長い間働いたがそれでも終にプロクネに代つてテリリュース王の妃となるやうに説き伏せられた。

王の悪計はここまで成功したが王はプロクネの口からこれまで虚待された状を人に語りはせぬかと懸念したので王は彌殘忍になつて彼女の舌を刳り出し匿とならしめた。

王はこれで安心だと思つたがプロクネの織物と縫紉に堪能なものには氣がつかなくなつた。彼女は字を書くことを習はなかつた。王妃ですらこの時分には字が書けなかつた。されど彼女は如何にも稀代な繪を織り出し字を織してそれを寄せ集めて二三の簡単な語とすることが出来た。で彼女はおのが話を通ずるに事を缺かなかつた。一年ばかりは織機と縫針とで忙しく働いた上にて一日のこと一反の掛毛氈の贈物を

持たせて王宮にゐるアイロミーテの許に一人の侍女を遣つた。

アイロミーテはその掛毛氈をわが前に底へ掲げその繪を見て驚いた。それはプロクネが自から織り出した。繪様でアイロミーテに告げやうと思つたことが歴史と分つたからである。アイロミーテは直と夜に紛れて姉を呼び迎へて共々に姉の息アイチスを連れてテリリユース王の國から逃げ出さうと計畫んだ。姉妹が王宮から忍び出た折に門の大きな扉の錆びた蝶番が軋んでキイーキイーと鳴つたので王は目を覺した。拔劔を提げ走せいで逃亡者を追つかけた。

姉妹は二人の間にアイチスを曳き摺りながら懸命に走つたがテリリユース王は彌彌近寄つて來た。

不圖姉妹は空中に昇き上げられる様な心地がして羽翼があつたやうに進んだ。神々が忽然に思つて二人を鳥に變へた。プロクネは燕にアイロミーテは紫鷓鴣になつた。小兒のアイチスは父の怒に觸るる恐れがないので鳥には變らなかつたので跡

(希臘神話)

に取殘された。

プロクネは今は翼の速い燕となつて幾日も幾日も王宮に戻つて行ては軒の下に逡巡ひ開いた扉の内に飛び込んだりして慰めつ賺しつして吾が兒を誘ひ出さうとしてゐたがアイチスは只奇麗な光つた眼の鳥を見ればかりで喃喃としやべる意が分らなかつた。

アイロミーテは鳥となつても愛に沈んでゐた外の鳥から隠れゐて、他の鳥の囀つてゐる間は黙つてゐたが夜になつて世間が鎮まると農家の窓の下に來て囀りながら陸の姉の冤罪の話や自分の悲しみをも語るのを習ひとしてゐた。

◎ペレロフチン

夏の日光が希臘の野原を焦し川々の水を涸し緑色のものは殆んどなくなつて了つた折しもペレロフチン山の雪深き山腹の高いところに牧場があつて柔らかな若草が青け

(希臘神話)

に生ひ茂つてゐてあらゆる色の美しい花が咲き揃つてゐた。

この牧場にはいかにも壯嚴なる泉が幾つもあつた。この泉は時を定めてその水が遙か高く蒼空に迸りあがつて再び蛤蜻翻りに下りて来るかと思ふと今一度細かい水煙を立てて上るのであるがその上る途端に無数の虹が現はれるのであつた。

中で一番美しい泉で水が甘くて冷たいのがヒツポクリーネの泉と言はれてゐた。

この泉の水には一種の不思議があつた。もとこのヘリコン山には斯んな泉は無つたのであつたが、或る晴れた月の夜に空より翼のある馬のヘガサスが此の牧場に下りて一盤高く嘶いて蹄で鋭く地を蹴たと思ふと此のヒツポクリーネの泉が迸り出た。ヘガサスはその甘い水を飲んでから雲の上遙かに駆け去つたが折々ここに戻つて来ては水を飲んだ。この馬は外の所では凡人の目に留ることがなかつた。

藝術の女神ミューズも亦ヘリコン山のこの美しい牧場に来慣れた。ミューズは九人の姉妹でその髪は月の光を受けると紫に見えたほど黒かつた。満月の夜にはヒ

ツポクリーネの泉の邊に来て舞踏するのを憤ひとしてゐた翼のある馬のヘガサスはミューズ姉妹等のものだと思ひつけた人もあつた。

ヘリコン山の麓で半を飼つてゐた牧者が餌を探つて歩く狼に羊の群を襲はれまじと思つて夜番をしてゐた折にヘガサスやミューズ姉妹を見受けたことも時々あつたが町に居るものは翼のある馬だの九人の姉妹が實際あることすら信するものはなかつた。

一日ペレロフロンといつた年若い勇士がヘガサスを探しに来たことがあつた。この勇士は亞細亞の或る國を荒し廻つてゐた三ツの頭がある巨大な龍を殺さんために或る王が派遣したのであつた。彼はこの翼ある馬の助を借つたなら世の怪物は退治せられぬことはないと思つた。

それで夜毎にペレロフロンはヒツポクリーネの泉に来てヘガサスの見える機會を待つて居たが長い間馬の壯嚴なる翼の羽一ツ見えなかつた。月がいつもよりは好え

渡つてゐた折一二度は物の影が軽く草の上にあしたと思つたこともあつたが仰いて見ると何も見えなかつた。又ある時は翼の羽撃つ音を聞いて林の内に白いものがちらと見えたこともあつた。

遂に一夜ヘリコン山の麓で一人の迷子があるのを見て野獸に喰はるる危険があつたのでその子を近傍で羊の番をしてゐた牧者の一人の許に連れて行つた。それから例の泉のところへ急いだが着いた時はいつもより餘程遅かつた。

その夜ペレロフランはベガサスが牧場の周りを活潑に疾走つてゐるのを見た。馬の銀色の翼は背の中の上に高く揚つてゐて奇麗な紅い蹄は地に觸れないほど速かつた。その嘶く聲は笛の音のやうであつたが、ペレロフランを見れば大きな白い翼を擴げて大空の奥深く翔け去つた。

ヒツポクリーネの泉近くに眠つた人は不思議に夢み易いのであつた。ペレロフランが眠つた間にミナーバ女神が黄金の轡を手にして傍に立つてゐるのを夢みた。夢

の裡に女神は轡をペレロフランに授けた。そのうちにベガサスが傍へ遣つて来て美しい頭を屈めてその轡を附けさせた。

ペレロフランは翌朝目を覺して見ると旭の光が顔を照してゐて夢に見た黄金の轡を手に握つてゐた。その轡には寶玉が鑲めてあつていかにも華美であるのでベガサスのやうな不思議な馬に装つても相應しく見えた。

ペレロフランはその日町へ降らずにヘリコン山に留つて莓や甘い橡實を食べてゐた。夜に入つてから再び泉の側でベガサスを待ち受けてゐた。いそいそとペレロフランはいつもの場所に行つて養の傍に隠れてゐやうとしてまだ落付いて腰も下さぬうちに微かに白いものが空に見えたがそれが段々大きうなつてきたと思ふ間に翼のある馬の姿となつた。

この美しい生物が低く降りたとき鷺の飛ぶときのように大きな圈を描いて舞ひ始めたがその光澤やかな翼は日頃見馴れた鳥の翼のやうではなくて南洋にゐる巨大な

信天翁の翼のやうであつた。彌低いところへ来て到頭その脚が牧場に觸れた。それから徐々どたく脚を踏んでペレロフランの許に遣つて来て頭を垂れて寶玉の鐘めである轡を附けさせた状は宛然夢の裡にみた通りであつた。直と轡は装はれた。ペガサスより温順い馬はなかつた又こんなに乗手を愛する馬もなかつた。轡の持主を主人に持つのを悦んでゐたので手綱の操縦には最も従順であつた。その翼を試みたら更に驚くべきものであつてペレロフランを背に乗せて雲の上に高く翔つた。今はカイミーラも恐るるに足らなかつた。

このカイミーラは三ツ頭のある怖ろしい怪物で獅子の首と山羊の首と蛇の首があつたのである。體は中程は山羊のやうに毛むく起つてゐたが尾の尖は龍のやうであつた。此の生物がムツクと起ちあがれば三ツの喉から火と烟とを吐き出した。その住んでゐた山地の殆んど全部は灰の荒地となつてゐた。この怪物のために未だ命を落さず又家や羊群をも棄てずにその地方に住まつてゐた少數の人民は不斷この生物

を怖ろ恐れながら日を送つてゐた。

それで世に勇剛の人があつたなら一人の勇士を得てカイミーラを退治するの必要があつた。

ペレロフランはペガサスを自由に御することが出来ると思つたので正面にカイミーラの山々の方にこの馬を導いた。ペガサスは驚くべき翔力、力の限りを盡して矢の如く空を急いで間もなく荒地の真中に手足を伸して臥てゐるこの犖犖な怪物の上に翩々と翔け廻つてゐた。

ペレロフランの望に従つてペガサスはカイミーラの臥てゐる所から稍懸け隔つた所へ颯と閃いたと思ふ途端に山羊の首がぐにやと垂れた。空氣中に嘔氣を催すやうな臭氣が満ちて烟のために暗くなつたがペレロフランとペガサスは無難に地上から高く駆けあがつてゐた。

怪物の再び鎮まるまで待ち受けた上で今一度急に撃つて行つたと思ふと獅子の首

は落ちてゐた。此度は吼えもしなければ格別火や烟を吐きもせなかつたがその怒つて腕く状は見るも凄かつた。ガカイシーラは清らかな空中までベガサスを追ひゆくことは出来なかつた。

今一度馬と乗手が突つ掛つたと思ふと蛇の首はカイミーラの體から離れてゐた。その折烈しい火が燃えて自滅して了つた。

その國の人民は早くもカイミーラが退治されたのを聞き知つて故郷に戻つて來た後間もなく奈何にも荒れ果てて灰色になつてゐた丘陵も一面葡萄園や穀類の畑になつた。

此後もベネロフランはベガサスの助を借つて驚くべき手柄を立てたので評判が高くなつて或る王女と結婚して王女の父の領國の半分を譲られた。

◎タイソーナス

(希臘神話)

ヒーリオスが毎日その奇怪な馬と火の車を空中に驅つた折に寶玉を鑲めた門を開き夜の黒い幕を引き拂ふたのはエーローラであつたエーローラは夜明の女神であつたからである。女神は奈何にも美しかつたのでその東に現はれた折には空全体が悦んで紅くなつた。

浮世にタイソーナスといつた人間が住んでいたが甚くエーローラ女神を愛して彼女の來るのを見んためいつも未だ暗い内から寐床を起き出でた。女神も随つて亦タイソーナスを愛して一日神々の王の許に走つて行つて王に乞ふてタイソーナスに一口天酒を飲ませて不死のものとなし給へと言つた。

ジューピター神は此の願を許し給ふたのでエーローラ女神はタイソーナスをオリムパス山に伴ふて女神の黄金宮に住まはせた。

女神はタイソーナスの年老ゆることのないやうにと頼むことを忘れたがため白髪がその黄金髪の中に交つて見えて來たが女神は相變らずタイソーナスに深切にして

(希臘神話)

美しい衣服を宛行つたり美味い不老食を食べさしたりしてゐた。それでもタイソ
ナスは段々年老いて来て數百年を経た後には動けなくなつたほど老衰した。用に立
つものは聲ばかりであつたがそれすら高くて細くなつた。今は餘りに老衰したので
保護のため一室に閉ぢ込めて置かねばならぬこととなつた。女神はタイソナスの
斯んなに老衰れてゆくのを見て奈何にも氣の毒に思つて彼を小さな昆蟲に變へて再
び浮世に遣り返へした浮世の人々は彼を蠶斯といつた。

今一度自由活潑の身となるのを悦んでタイソナスは終日野原に跳び廻つて喜ば
しげにエーローラ女神にぎいすちよーぎいすちよーの聲を發してゐた。

◎コーメータスと蜜蜂

ペレロフランの後長い長い年月を経てコーメータスといつた牧者がヘリコン山の
麓で日頃山羊を飼つてゐた。

(希臘神話)

(希臘神話)

山羊の番をしてゐる間に松の樹の下に臥しながら牧笛を吹いたりしてゐた。折々
温かな夜の三四回も續くことがあれば山羊を厩舎に牽き入れもせず晝夜とも山羊
と共に山上に留り慣れてゐた。コーメータスは或る時姉妹のミューズ女神等がヒッ
ポクリーネの泉の周りに舞踏してゐるのを見た。

泉から程遠からぬ所にミューズ女神等の小さな祭壇があつた。コーメータスはそ
の祭壇へ何か供物を捧げたいと思つたが身は奴隷であつたので自分の物といつては
何一ツなかつた。わが生涯を山羊の看護に任せてゐれば山羊の一頭や二頭はわが物
であらうと思つたので一日仔山羊一頭を群中から取り出して祭壇の供物に捧げた。
その夜主人が山羊を數へて一頭足りないのが分つた。酷く立腹しながらコーメ
ータスを捕へて主人の宮殿の廣間にあつた大きな櫃の中に押し込めて蓋を閉ぢ錠を下
し憐れな牧者を餓死させやうとした。

されどミューズ女神等はその禮拜者を忘れなかつた。ヘリコン山の草深き麓に笛

の音がせなくなつたのに気がついた。大きな紫色の蛾が日頃女神等の月夜の舞踏に立ち交つて羽撃も廻つてゐた。女神等は此の蛾の一ツを遣つて牧者の成り行きを探らせた。

蛾は直ちに奴隷の小舎に飛んでいつたがコーメータスは居なかつた。それから宮殿の窓の一ツに飛び込んだ。コーメータスの主人は友人等と酒を飲みながら長い食卓の前に坐を占めてゐた。紫の蛾は蓋の一ツから酒を吸ひ取つて火の高い青銅製の洋燈の周りに翩々と上下した。次に縫紉で花野の模様を表はした垂幕の上を爬ひ廻つたが香も味もなき縫紉の花に愛想が盡きて床に下りたが床の上に据えてあつた杉材製の櫃の香氣に誘はれて櫃の傍に爬い廻つてゐながら鍵眼を覗き込んでコーメータスを見附けたので疾くヘリコン山に飛び去つてその事をミニューズ女神等に告げた。

翌日蜜蜂が宮門の内に飛び込んで来てコーメータスの主人に行き會つた途端にそ

(番 蜂 話)

(番 蜂 話)

の鼻を刺した。後間もなく家婢や番兵が見て居たら同じ蜂が杉櫃の彫刻のしてある側を爬ひ上つて鍵眼に這入つて行くのが目に留つた。

直之又蜜囊(蜂の體中にある)の張りきつた他の蜂が来て同じ鍵眼に這入つて行つては又出て来たが出て来たときには蜜囊は空虚になつてゐた。

コーメータスが一年も櫃の中に押籠められた後一日残忍な主人は無論中には一握の白骨より外には何もあらずと思ひながら櫃を開かせたところが豈圖らんコーメータスは無事に生きてゐた。奈何にも不思議であつた。

コーメータスは蜂の爲めに養はれてゐた次第を語つた。主人は蜜蜂は皆ミニューズ女神等の特別の使者であつたのを知つて女神等がコーメータスを保護させたものと信じて爾來コーメータスを大に尊敬し極めて深切に待遇した。

◎アードニス

アドーニス は年若く温厚で甚う美しかった。有らゆるものが彼を愛した。花は脚下に開いた蜂や蝶は身の周りに羽うち廻つた。獵犬を連れて森の中に狩に出れば美の女神ウキーナスは物蔭に隠れながら遠くから彼が跡に付き従ふた。女神は彼が身に何か災難が落ちかかりはせまいかと恐れた。森の中には狼や豹やもつと危険な獣がゐるのを知つてゐたからである。

残忍な軍神のマーズは温厚な美しい物とみれば皆憎んだが中でも一番憎んだのがアドーニスであつた。一日この少年を襲はんために大きな鋭し牙のある瘡惡な野猪を遣つた。

二三時間も経つてがキーナス女神はアドーニスが脇腹の傷からポトポト生血を滴らして死んでゐるのを見た。女神は涙を落しながら彼が身邊に倚り屈んだ。女神の涙が地に觸れたらその涙が白頭翁に變りアドーニスの傷から落ちた血の滴は皆赤薔薇になつた。

(希臘神話)

魔はしきアドーニスガ暗い下界に降つたので地上のものは皆悼み悲しんだ。野の花は凋んだ樹は葉を落した海豚は濱邊で泣いた。鷺は悲しい歌を歌つた。ミューズ女神等は「悲哉悲哉さてもアドーニス、彼は死しぬ愛らしいアドーニス」と泣き叫んだ。森の神エコーは少年が鷹狩をした暗い森から「彼は死しぬ愛らしいアドーニス」と答へた。

(希臘神話)

終にジュピター神がアドーニスは再び來つて生涯の半分は上界で半分は下界で日を送るべしと宣ふた。それで季節の女神アワアーズがアドーニスを連れ戻した。かくて花は再び開き樹は新らしい葉を生じて人皆今一度快活になり幸福になつた。

◎マイダス王

その一。マイダス王と黄金の感应力

一日半人半羊の神等の中にて一番年老いて今は酷く弱つてゐたサイリトナスがマ
イダス王の葡萄園の内にて途に迷つた。農民等はサイリトナスの頼りなく彷徨ふて
歩くことも出来兼ねてゐるのを見て王の許に連れて來た。

長い前に葡萄酒の神のバツカスの母が死んでマアキユリーガ幼少なバツカスを此
の山に連れて來て山の神等に預けた折にサイリトナスが葡萄酒の神の乳母となり又
教師となつた。今はサイリトナスが年老いたので此度は却つてバツカスがサイリ
トナスの世話をした。それでマイダス王は農民等を遣つてこの半人半羊の神を無事に
バツカスの許に送らせし。

此の好意に對する報酬としてバツカスがマイダス王に何んでも欲しいものを與へ
やうと約束した。マイダス王が心私かに希ふものがあつた。此の時分には王といふ
王は皆その宮殿内に貴重品を藏めて置く寶庫があつた。マイダス王の寶庫には多數
の寶玉や金銀の器や金貨櫃やその他の貴重品が入れてあつた。

(希臘神話)

(希臘神話)

マイダスの幼少の時日頃父の宮殿の傍の砂の上を往來する蟻を見つめてゐた。彼
は蟻塚を蟻の宮殿のやうに思つた。又蟻は財寶を搬び入れるのに醒醒してゐるので
あると思つた。方々から小さな白い包を搬びながら塚に走せ寄つたからである。

その時マイダスは成人の後は醒醒と働いて財寶を寄せ集めやうと決心した。
王は今大人となつた何が楽しみといつて日増に財寶の殖えてゆくに越した樂しみ
はなかつた。常に種々の物を交換へてみたり賣つてみたり或は何か新税を課してみ
たりして何もかも金が銀に更へる工夫をしてゐた。實際王は我が櫃の中の燦爛たる
黄金が世界の中に一番美しい一番貴い物だと思ひ始めたほどに財寶を寄せ集むるこ
とに多年の間苦心した。

それでバツカスが何んなりと欲しいものを與へやうと言つた折にマイダス王の心
に第一に浮んだのは財寶であつたので王は吾が手の觸れたものは何んでも黄金にな
るものをも望んだ。その願は許された。

マイダス王はその好運を夢かとはかり疑つた自分ほき仕合せなものはないと思つた。

その願の許された折に王は偶櫛の木の下に立つてゐたので先づ手始めに吾が手を舉げて櫛の枝に觸れたと思ふと枝は橡質その儘いかにも美事な黄金となつた。王はその成功を喜んで嬉笑したそれより地上にあつた小石に手を觸れたれば其の儘金塊になつたが次に樹から林檎を摘み採つたら手には麗はしい燦爛した黄金の林檎を握つてゐた。最早や疑ふまでもなかつた。マイダス王は眞に黄金の感應力を得た。これは難有と思つた。それより路傍の百合に手を觸れたれば眞白なのが輝つた黄色になつたが王の手が觸つたため斯く變つたのを慙ぢたらしくその頭をこれまでよりは低く屈めた。

外の物をも黄金にする積にて一先王は奴隸等が御殿に持ち込んで來た小さな食卓の前に坐を占めた。焼いた玉蜀黍は新しくて噛み易げにあつた葡萄は汁が多くて甘

(希臘神話)

さうであつた。がその甘さうな一房を取つて一粒の葡萄を味ふたれば口の中で硬い黄金の球になつた。甚だ不快に思つて黄金の球を食卓の上に置いて焼麥を試みたが口中に硬い黄金を頬張るばかりであつて咽ぶやうにあつたので一啜りの水を口に入れたがこれすら唇が觸つたので黄金液になつた。

斯うなつては王の輝つた財寶も王の目に醜く見え始めた。して王の心までが黄金になつて來たやうに重くなつた。

その夜王は黄金の枕に頭を載せて華美やかな黄金の臥被の裡に臥したが氣が休らなくて眠れない。さうして臥してゐるうちにも王妃や王兒女や侍臣等が皆硬い黄金の偶像になつて了ひはせぬかと心配し始めた。

これは王の恐なる願から起つたことの中分けて悲しむべきものであらう。今となつて王は始めて富が有らゆる物のうち一番望まじきものでないといふことが分つた。永く黄金の慾念を絶つことが出來た夜が明けると直様王はパツカス神の許へ駆けつ

(希臘神話)

けてこの不幸な賜物を引き戻して貰ふ様に歎願した。

バックラス神は笑ひがなら「噫汝はもう黄金は澤山だといふのだな。宜しい、彌この上物を黄金にしたいと思はぬならバクトーラス河の源たる泉に行つて浴するがよい。その泉の清水が黄金の感應力を洗ひ去るべし」と宣ふた。

マイダス王は悦んで神の言に従つたので黄金の感應力から離れることが出来たが泉の水にその奇怪な魔力が移つたので今日までもバクトーラス河に黄金砂がある。

その二。マイダス王の耳が驢馬の耳になつた由來

マイダス王黄金の感應力について奇怪な經驗を積んだ後は財寶庫の中のものには最早や頓着しなくなつて塵埃が積み蜘蛛の巢の張るに打ち任せて野原に出掛けて行つてバンに従ふた。

(希臘神話)

(希臘神話)

バンは羊群の神で牧者や農民の恩人であつてマイダスの王宮から程遠くない山中にあつた洞の中に住んでゐた。折々笛を吹いたり森の神と舞蹈したりしてゐた。バンには山羊の様な角と脚と毛の多い尖つた耳があつた。

バンは陽氣な無頓着な無遠慮な風の神であつて坐して手製の笛を吹いてゐるとその音は如何にも樂しげに湧くがやうに起つて來て森の神等は舞蹈りだし鳥の群は歌ひ始めるほどであつた。

マイダス王はバンの笛を聴くと吾が身の王であることを打ち忘れ何もかも無頓着になつて了ふのが常であつた。王は野に出で温かな日光を受け山の新鮮な空気を呼吸するのを悦んでゐた。

一日バンは戯に森の神等に誇つて吾が笛の音はアポロ神の琴の音にも勝つてゐると言つた。森の神等は笑つてバンとアポロとは山の神モーラスを審判者に立てて其々奏樂せねばならぬと言つた。バンはアポロの妙手に對し吾が技巧を闘してみ

たいと言つた。モータスは審判者たらんことを承知した。それで競技の日が定められた。

アポロは琴を携へてその場に臨み頭には月桂樹の冠を戴き身に着けた美しい紫の衣裳は長く裾を地に曳いてゐた。琴は黄金造りで象牙や寶石を鑲嵌してあつた。パンの笛は七本の蘆を無造作に接合せたるまでのものにて此の琴と對照ては奈何にも簡單であつた粗野であつた。

アポロとパンは奏樂を始めた。モータスはアポロの方に向いて傾聴した草木も亦皆アポロの方に向いた。奏樂を始めてから長くも経たぬうちに山の神はパンを中止めて「汝の簡單な笛はアポロの珍奇なる琴とは較べものにならぬことは汝自身にも分つた筈ぞ」といつた。

パンはその審判に服したこの競技は滑稽に過ぎなかつたことが分つた。森の神等や牧者等はモータスの審判の誤らざるを認めしたが獨りマイダス王は琴の音の眞價を

(希臘神話)

知るの趣味なくて笛の音をのみ悦んだので卒然躍り起つて「こは不正の審判なり、パンの奏樂はアポロの奏樂に勝れり」と呼はつた。

此の時アポロの外は皆笑つた。アポロは怒つて烈しくマイダスの耳を凝視めたと思ふうち忽ち王は吾が兩耳の長くなつて毛の生ぬて來るやうな心地がした。王は傍の泉へ走せ寄つて吾が姿を水面に映して見れば兩耳は驢馬の耳に變つてゐた。

かくマイダスはおのが愚昧のため二回まで神々から罰を受けた。王はこの長い毛の多い耳を酷く愧ぢてそれから常はこの兩耳を隠すために大きな紫色の頭巾を被つてゐた。

一日宮庭の理髮師が王の散髪を命せられた折に王の秘密を發見して餘りに驚いたのでガタンと大きな音をさせて鉄を床の上に落した。理髮師は吾が目に見たことを人に告げやうものなら吾が首はないものと思つたので誰にも一言をも漏さなかつた。一日吾が心の思を弛へんものと寂寥しい所に行つて地に穴を掘つて吾が見たこと

(希臘神話)

を地に向つて囁いた上で土を被せて秘密を葬つた。

だが秘密は一旦口より漏らした上はそれを隠すのは容易でないのである。後一年程経つてその場所に蘆が生えて南風が吹くと蘆は終日互に囁いてマイダス王は頭巾の裡に驢馬の耳を隠してゐると言つたので秘密は廣く世に傳つた。

◎王と榊の木

昔テツサリにシーリーズ女神に屬してゐた美しい森があつた。その中の樹は幾百年経たものであつたのか誰とて知つてゐるものはないが奈何にも大木であつて大きな枝がこんもりと入交つてゐるので日光も差し込まぬほどであつた。

夏の炎天でもこの森の中は涼しかった。仔鹿や母鹿は此所にさへゐれば安全と思

(希臘神話)

つて松葉の上に臥してゐた。禽が高い木の梢から歌つた鳥の巢が樹の葉の間に隠されてあつた。

(希臘神話)

シーリーズ女神の宮居は打ち開いた傾斜地に立つてゐた。その邊りに泡沫を噴出す泉が幾ヶ所もあつてその水のために四邊の景色はいつも新鮮で青々としてゐた。ここは分けて觀事な榊の大木があつてその梢は高く空に聳えてゐた。その低い枝には幾個となく花環と誓願の小札が懸つてゐたこの小札には女神の救助を得た人々の感謝の辭が記してあつた。

此の森の樹には樹毎に樹の神が住んでゐたが樹の神の生命はその住んでゐる樹の生命と死活を共にするのであつた。樹が枯れたなら樹の神も亦死するのであつた。こんな森には未だ斧の音のしたことがなかつた。正午になると樹の神等は榊の大木の周りで舞踏るのを常としてゐた。折々は彼の小さな角と山羊の脚のあるパンが來て共々舞踏ることもあつた。

その國の王が附近に宮殿を新築してゐた。壁は出來上つたが屋根の材木がなかつた。一日王は二十人の樵夫に銘々斧や鋸を持たせてシーリーズの森に遣つて來た。

王は樵夫に命じて直と着手して森の樹を悉く伐り倒せといつたが樵夫等は森はシーリーズ女神のものであつてその樹はいづれも千年以上も斧を入れたことがなかつたのを知つてゐるのでこの命令に従ふことを躊躇した。

その折王は焦燥つて斧を取り丁と斧の刃を美しい樾の幹に打ち込んだ。斧を打ち込むと號叫の聲が起つた。それは樹の神の聲であつたが王は斧の音がしたまでだと言つて止めなかつた。

折しも老いた女僧がシーリーズ女神の宮居から出て來て柔和に王に告げて女神の怒を招くは得策であるまいと言つた。女神は地から生ずるものには何物にも威權を有ち給へることを注意した。

(神國神話)

此の時王は彌速く斧を振り上げたして王は奈何にも押柄な風で親切な老女僧に「そこ退いた。斧が當るぞ、汝の樹は今度見るときには吾が宮殿の屋根となつてゐやうぞ」と言つた。

女僧は黙つて靜に立ち去つた。が不思議にも俄に相貌が變つて來てシーリーズの相貌に酷似であつた。

間もなく樾の大木はメキメキと倒れた。樹の神の死に際の際の悲鳴も聞えた森の他の神々から哀悼の聲も耳に入つた。樵夫等は怖ぢ恐れて悦んで外の樹を見遁したであらうけれども、王は殘らず伐り拂へと言ひ張つた。

王宮は間もなく落成つたいかにも壯麗な建物であつた。萬事都合よく運んだのでシーリーズはおのが神聖な森を破壊されにのを忘れて了つたのか但しは我を罰する力を有たないのかと王は思つた。

されど罰は靦面に來た。シーリーズ女神の命を受けてアマミン(飢饉の義)が今

(神國神話)

テツサリに來た。女神の家婢ファミンは恐ろしい老婆であつて到る所にあらゆる縁のものや生育つてゆくほどのものは都て根扱にして了つて飢餓の種を蒔き附けた。ファミンが近寄つて來ると王國內の川々の源となつてゐるシーリーズの森の内の美しい泉はいづれも乾き始めて川々の水も涸れて了つた。雨も降らなくなつて有らゆる收穫が乏しくなつた。農民は落膽して家財や羊群や獸群を携へて追々と他郷に立ち去つた。

一夜宮門は衝られ扉は閉ぢられたれどもファミンは王の宮殿に這入つたので國王自身にも飢餓の何たるが分つた。王は咎を侍臣等に歸して虐待したので侍臣等は一人一人と出奔して了つて到頭廣い王國に残つたものは王と一人の王女ミードラばかりであつたミードラは終始王と艱難を共にし父に孝養を盡した。

シーリーズは尙雨を引止めてゐたので殆んど生きたものは何も生長し得なかつた野の縁であつた所や羊の群と家畜の群とが餌を食へた所も今は砂原となつた。旅人

(希臘神話)

は尙海邊の富裕な都會に往來する途すがら王宮の前の大道を通行した。今は王とミードラとが食物を手に入れるのは大道に坐して他郷人に乞ふより外に途はなかつた。

(希臘神話)

到頭飢餓に迫つて王は一旦王女を奴隸として旅商人に賣つて僅に暫らくの間飢を凌ぐだけの食物を得たが斯くまで高價に買入れた食糧すら長くは續かないで憐れな王は令までにない憂き目を見ることとなつた。王國は一面の沙漠となつた最終の友であつた王女は國を去つて了つた。樾の大木が再び生長して王國が以前のやうに豊饒に且繁昌することとなるものなら王は悦んでその壯麗な宮殿も荒れ果てた國の王たる虚名をも見棄てたであらう。

だが今となつてはそれも及ばない。シーリーズ女神すら吾が神聖な森の樹々を再び生ひ茂らせることも又樹々の中に住んでゐた樹の神等を蘇生らせることも出来なかつた。

◎ジューノ女神とハルサイ

オニー

ジューノ女神はオリムパス山の上にて黄金の椅子に坐しながら地上に起つた有らゆることを見透し給ふた。女神は善き婦人の好運を守り給ひ時に新婦の守護者であつた二羽の神鳥——孔雀と郭公——が大抵は女神の傍近くに見えた。御坐の階段には女神使のアイリスが常に半眠りに眠つて地上へなり下界へなり又は女神が遣はし給ふ何所へなり鳥のやうに翔け出す用意をしてゐた。

アイリスはオールドオーシアン（老大洋の義）の孫娘であつてその姉妹にはダアリククラウド（黒雲の義）といふがあつた。アイリスの橋といふは虹であつて天と地とを連接させたのである。アイリスには黄金の翼があつた。その衣裳は奈何にも

（希臘神話）

美しい花の色から成れる七色であつた。

ジューノ女神を最も忠實に崇拜する者の一人はテッサリ王シーイクスの妃ハルサイオニーであつた。偶シーイクス王は海上遙に遠い旅行をせねばならぬこととなつたが一夜王の留守中に暴風雨が起つた。

ハルサイオニーは風の神イーオーラスの娘なので兄弟のウキンド（風の義）等の爲ることを能く知つてゐたので酷く怖れ恐れてその夜を過した。翌日ハルサイオニーは海岸を住きつ戻りつして夫の身に何事か起りはせぬかと心配しながら夫の乗り込んでゐる船の消息を待ち受けて居た。王妃は氣も狂亂するばかりに周章てた。到頭夜に入つて王妃は花環をジューノ女神の宮に捧げてその救を願つた。

ジューノ女神は暴風雨の間に起つたたとを皆知つてゐた——王の船が巖に打ち揚げ砕けて了つて王は早や海草と共に漂つてゐることを知つてゐた。

されど神々には不思議な事が出来るのだ。女神からの一言で女神使アイリスは大

（希臘神話）

空に美しい虹の橋を架けたれば姉妹のダアトククラウド等はその背後に集つた。女神使は素早く橋を傳ひて地上に降りた上にて眠と夢の神のソムナスの洞の方に翔つて行つた。女神使は紅色の罌粟——眠を催す罌粟——の一面に生えてゐる廣い野原の上を低く翔つてソムナスの洞の内に水源のあるリーシー川の緩く流るる水音を聴いた。間もなく冷やかに静かな暗い洞に達したがそこには黒い羽毛を推く積み上げた大きな寢床の上に眠と夢の神のソムナスが熟眠してゐた。この神の周りには有らぬ種類の夢があつた——古い夢や悪い夢や美しい夢や醜い夢や眞の夢や偽の夢があつた。女神使アイリスが這入つて來たら薄暗いのが明るくなつて彼女の衣服の七色が洞の隅々まで反映した。彼女はソムナスを喚起してジューノ女神の使命を述べた。

その夜夢の神ソムナスがハルサイオニーに夢を遣つた——海岸を少し離れた場所
で破船のあつた夢を遣つた。翌朝早くハルサイオニーはおのが夢みた場所へ走せつ

けてみれば木材が漂つてゐて其の中に何か光つてゐるものが見えた——王の冠のやうに輝つてゐるのが見えた。この場所へ行きたくなつて來たので前の方に飛び出さうとするとやがて翼で引擧げられて激動する波の上へ體を持つて行かれるやうな心地がした。こは女神が王妃ハルサイオニーをアイリスのと同じ色の羽毛のある鳥に變へたからである。一聲高く叫んでハルサイオニーはシーイクス王の許に翔け寄つた。彼女が木材の漂つてゐるのに止つたと思ふと光つた冠は冠毛となつて一旦死んだ王はハルサイオニーのやうな羽毛のある生きた鳥となつた。

かくて結局シーイクス王とハルサイオニー妃とは離れなかつた空氣の新鮮なこと日光の輝いてゐることは以前のやうであつた。彼等は今は一番の翡翠鳥となつても尙幸福であり得た。これより毎年この二羽の鳥が海上に漂つてゐる巢を造つた。ハルサイオニーが雛を孵す間の十四日といふものは一陣の風さへ吹き起らないで海は鏡のやうに滑かであつた。風の神のイーオーラスが海上を守つたからである。その

時から冬至の天氣麗かに海上波平かな日を翠翫日和といつた。

◎ハークリーズ

その一。捕鯊の中にあるハークリーズ

古代の希臘の彈琴者が日頃歌に誦つたあらゆる勇士の中で取り分け希臘人に愛された一人はハークリーズであつた。數ある勇士の中で斯くも人氣を得たのはその體力と勇氣に於て拔群であつたからである。

ハークリーズは生れて未だ一歳にも足らぬ嬰兒であつた折初回の勇しき功名を立てた。そは斯うであつた。一日母のアルクミーネが雙兒のハークリーズとイフキクリーズを浴させた上にて食事をさせて雙兒の搖籃となつてゐた中空の青銅の楯に入れ

(希臘神話)

(希臘神話)

て守歌を誦つて眠らせた。その夜世間が寢靜つた頃二頭の大きな蛇が大扉の下に這ひ込んで雙兒の眠つてゐる所へ床を傳つて徐々と這つて來た無論この蛇に咬まれたら生命はないのである。蛇は楯の上に頭を上げて小さな凄い眼で雙兒を見下ろした。その折丁度雙兒は目を覺した。ハークリーズは楯の中に起上つて電光一閃、兩蛇の頸を掴んで力を込めて喉を挫めつけた。イフキクリーズは叫び聲を揚げてやがて泣き出した。蛇は拒まれ絡まつて尾でバタバタ床を打つた。

母のアルクミーネはその音を聞きつけて雙兒の父のアムフキトリオンの寢てゐるを喚起したので父は寢臺の上の木釘に懸けてあつた劍を取つて奴隸に火把を持つて來させながら何んな敵が襲つて來たのかも知らないで小兒等のゐる室に這入つて來た。

するとハークリーズは二頭の大きな蛇の首を掴んで珍らしい玩具でも手に入つたかのやうに歡呼の聲を揚げてゐた。父が楯の傍に來たのを見てその脚下に二頭の死

んた蛇を放下した。その折父の驚きは何んなであつたらう。

聖朝母のアルクミーネはタイリースィアスといつた賢い老人に問ふて生れて僅に十ヶ月になる嬰兒が二頭の大きな蛇を掴み殺すとは何たることであらうと言つた。タイリースィアスはこれに答へてこの見成人の後は如何なる野獸よりも又如何なる人よりも強くなつて前後十二回の目醒ましき手柄を立て後オリムパス山に登つて神々と共に住まうであらうといつた。

その二。ハークリーズの青年時代。

ハークリーズの生長するや一船希臘の男の兒等の習ふこととなつてゐた事は何にもかも注意して教育された文學の教も受け琴を弾くことや弓矢の業も習つた。父よりは希臘人の競技として行はるる兵車の驅り方を教つた。拳闘や角力や投環や鎗と楯を持つて闘ふことをも習つた。晝は常に父の傍に侍り夜は虎の皮を被せてある

寢臺を父の寢臺の近くに据えてゐた。

漸く成人した頃暫くは山の上の牧者と生活を共にせんために行つた。彼は一日谷間の寂寥しい場所に臥して熱い日中に眠つた。眠つてゐる間に奇怪な夢を見た。その夢に自分が通り掛つた道が俄に二股に岐れてどつちへ行つたがよいか分明らかになつた。一方は平坦で行き易く山路を少し降れば樂しげな町に出られさうで家々の屋根が既に見えてゐた。他の一方は凹凸した山路で登るのが奈何にも困難らしいやうであつた。この方の長い道程をズンズン登つて行くと路は頂上へ登るにつれて彌凹凸が甚しくしつて來て到頭行手の道は雲の中に隠れて見ゆなくなつた。

ハークリーズがどつちの道を行かうかと考へながら立つてゐると一人の若い婦人が町の方へ續いてる道を徐々と遣つて來るのを見た。この婦人の上衣には一面に有らゆる色の花が縫紉してあつて頭髮には凋んだ薔薇の花環をつけてゐた。

婦人はハークリーズの立つてゐる所に來た折岐れ道で考へてゐるのを見て直と町

へ出られる平坦な道を行くやうにと熱心に勧めた。婦人はハークリーズを見て「あの町へあらつしやいませな町の人は愛想の好いものばかりで貴郎のお好きなものは何んなりと差し上げてご不自由はさせません街の塵の中や夏の炎天にお働き遊ばさるでもよいのです。終日楽しい庭園にお出遊ばして泉の噴出すのや鳥の歌ふのや琴の音をお聴き遊ばせばよいのです」といつた。

ハークリーズが町の方を眺めたら新鮮な朝の風が吹き送つて来る音楽の響が微かに耳に入つた。家々の周りには立木や花の樹の茂つてゐる庭園がいかにも涼しげにも又懐しげにもあるので若い婦人の勧めに従いたいやうな心地がした。されど尙彼れを引留むるものがあつた。

丁度その折険しい山路の方に誰れか立つてゐるのを見た。これも亦若い婦人であつたがその風采は初めに遇つたのとは大分異つてゐた。その衣服は質素な白いのを着てゐた。その目つきは憂を含んでゐたが勇ましげにあつたこの婦人は言つた「ハ

(希臘神話)

ハークリーズ君よ私は眞のことを貴郎に申し上げます、私の妹は貴郎をお騙し申さうとしてゐます。この下の原にあるあの町の人々が貴郎に仕向けやうとしてゐる愉快な事と申すものはいづれも貴郎のお爲めになりません。結局は貴郎のお心に夢にも思はる愉快と申すもののために高い直段をお拂ひなさることになります、あの町へお出で遊ばすな私と一緒にこの山路をお登り遊ばせ、山路を登りますのは難儀でありまして段々と高くお登りなされると尙々難儀になつて参りませうがここに貴郎のいつまでもお厭きにならん快樂があります。貴郎の肺には山の空氣が這入りませう。この空氣を吸ひながら難儀な山路をお登りになれば貴郎は立派な男子にお成り遊ばすのです。貴郎にどこまでも高くお登りなさる勇氣さへありましたなら此の山路は結局貴郎をオリムパス山へお連れ申して貴郎はいついつまでも不死の神々とご一緒にお住まい遊ばす筈なのであります。ハークリーズは此の夢を判断するの明ありて山路の方を撰んだ。

(希臘神話)

この後間もなくユーリスシアス王の朝に仕へて王のためには水火も厭はぬ決心をした折にハークリーズ生涯の活動が始つた。彼は従兄弟のマイシーネ玉ユーリスシアスより稍後れて生れたのでこの従兄弟の奴隷となるのが彼の運命であつた。希臘人の歎賞するのは體格の強大といふことに勝るものはなかつた。ハークリーズは既に肩幅の廣いのと腕の筋肉の太いのとで評判が高かつた。しかるにユーリスシアスは玉ではあつたが平素虚弱くて病氣がちであつた。

斯くてハークリーズが初めてユーリスシアス王の前に立つたとき王は強大な若い従兄弟を見てこの従兄弟と自分とは體格に著しい差等のあるので我が勇氣のおのづと凹むやうな心地がした。その時怒の色を帯んで額を蹙めた。そして案出される限りの至つて困難な至つて危険な仕事をハークリーズにさせやうと思ひ定めた。

ハークリーズがユーリスシアス王のために成し遂げた仕事の後日評判高くなつてハークリーズが前後十二回の勞役といはれた。一回は一回と仕事が困難になり且故

郷を離るることも遠くなり未だ世に知らぬ西方の國に近附いて行つて十二回の異てには到頭下界の王プリュートの治めてゐるヘーデイズ(下界の義)の門までも押寄せた。

その三。第一回の勞役。

ニーミリア谷の獅子を統殺すること。

ニーミリアにあるジュビターの殿堂の周りの神聖な森の近くにニーミリア谷の獅子といつた猛烈な獅子が洞穴に住んでゐてニーミリアの溪谷の周邊の國を荒してゐたので住民は常に戦々競々としてゐた。夜はいふまでもなく晝でも折々暴れ出して幾百となく家禽や羊を殺したり時には成人や小兒を捕へて食ふこともあつた。

ユーリスシアス王はおのが従兄弟のハークリーズを遣つてこの獅子を殺させるの

を上策と思つたのでこれを彼が第一回の仕事と定めた。

この仕事を成し遂ぐるに付て別段これと定つた考もなくこの若い勇士は弓矢を携へて發足した。ヘリコン山の麓まで来ると一本の橄欖樹が目についた。岩の多い土地で徐々と生長したもので織緯が締つてゐて節瘤だらけであつた。ハークリーズはこの樹を根扱にして大きな棍棒を作つた上でニームリアの谷に行つた。

一人の牧者も居ないので獅子の様子を尋ねることも出来なかつた。牧者等は皆獅子を恐れて牛羊の群を成行に任せて戸内に逃げ込んでゐたからである。

ハークリーズは終日殿堂の邊りで見張つてゐた。暮れ方に獅子が窩に戻つて來たのを見ると奈何にも猛くて怖ろしい状であつた。鬣は血に塗れてゐて腮から生血を垂つてゐた。ハークリーズは叢の内に身を隠しながら弓に矢を番へた。獅子の近寄つて來た時その脇腹へ向け矢を放つたが反彈つて草の上に着た。獅子は立ち止つて左右を見廻し齒をむき出した。その折ハークリーズは又一矢を射たが初のや

(希臘神話)

(希臘神話)

うに反彈つた普通の獅子とは違ひ皮が奈何にも韌かつたからである。やがて獅子におのが姿を見られたので三度目の矢を射放たうとしてゐた。矢が獅子の尾を打たので躡つて跳びかかつた。ハークリーズは棍棒で應つて獅子の頭を打碎いた獅子はそのため眼が眩んだ。その時ハークリーズは両手で獅子の頭を掴んで丁度嬰兒の時に分に蛇を絞殺したやうにこの獅子を絞殺することが出来た。ハークリーズの第一回の功勞は斯くの始末であつた。

ハークリーズがユーリスシアス王に復命した折に肩の上にこの獅子の皮を引つ掛けその頭を胃のやうに自分の頭の上に戴いてゐた。生きてるままでニームリア谷の獅子が俄に王宮に這入つて來てもこれに増した恐怖はあるまじと思はれた程に王は怖れをのゝいた。

ハークリーズは直と今一つ棍棒を作つた。それ以來はその棍棒と獅子の皮を身につけてゐないことは殆んどなかつた。

その四。第二回の勞役。

ラーニアーン、ハイドラ(九頭一體の水蛇)を殺すこと。

エリスシアス王がハークリーズにさせやうと案出した第二回の勞役といふのから見れば第一回の獅子一頭を殺すぐらゐは兒戲のやうに思はれた。そはハークリーズが奈何にも勇ましくて強いのが分つたので王はラーニアーンハイドラを殺しに遣つたからである。

是は九ツの頭のある水蛇で内一ツの頭は不死であつたから殺せる筈のものではなかつた。酷く有毒のものであつてこの蛇の出没する沼から上る空氣を吸ふてすら死ぬ人もある程であつた。その巢窟はエーミモネの泉の邊にあつた。これが爲めその近邊に住んでゐる農民にこの泉の水を用ゐるものがなかつた。

(希臘神話)

希臘の南部にあるアアゴリスの夏は長くて乾燥くのと泉の少いので住民は亦酷く難澁した。

(希臘神話)

ハークリーズの甥にアイオレーアスといふのがあつた。ハイドラを退治に行くと、きハークリーズはこの甥を連れて行つた。

塵に塗れて長い田舎道を通り越してハークリーズとアイオレーアスの二人はエーミモネの泉に着いた。着くと直に目に附いたのはハイドラが窩から九ツの頭を伸ばしてどの頭も怒氣を含んでシユシユと呻つてゐるのであつた。

二三本矢を射放つたらハイドラは沼に出て來たのでハークリーズは劍を抜いて其首若干を斬り棄てたが首一ツ斬ると新に二ツの首がその跡に生じて新しい頭が斬り棄てた首より却つて烈しく呻つたり咬んだりし始めた。斯く闘つてゐるうちに蟹が出て來てハークリーズの脚跟を噛んだ。これではならんと焦心つてハークリーズは別に工夫を廻らしアイオレーアスを呼んで沼の近傍に茂つてゐる若木の森に火を附

けて燃木を持って來させた。

その時ハークリーズは首を斬つては焼いて到頭一つ外残らぬまで焼いて了つた。この残つた一ツは不死の頭であるので燃えない。それを斬り落しはしたが草の中に落ちたまままで此れまでより却て烈しく毒を吐き出したのでハークリーズはその首の上へ巨大な岩を轉ばして此の上害をさせないやうにした。

闘が終つてからハークリーズはおのが矢をハイドラの毒の中に漬けたので奈何にも危険な武器で扱ひ難いものとなつた。

その五 第三回の勞役。

エリマンサス山の野猪を生擒ること。

ユーリスシアス王は次にハークリーズを遣つてエリマンサス山に住んでゐる野猪

(希臘神話)

を獲させた。王はハークリーズに命じて野猪を捕へて生きたままマイシーネ市へ持つて來いと言つた。ハークリーズは何んな危険な野獸でも殺すことは出來やうがそを生擒るのは頗る困難な仕事であらうと王が思つたからである。

(希臘神話)

エリマンサス山はアークテアにあつた。アークテリスの境を出でてハークリーズが勞役を取つたのはこれが初めてであつた。

エリマンサス山に登る途中でハークリーズはその山にある洞に住んでゐる友人のフアローといふ半人半馬の怪物を訪問した。フアローの洞に精良の葡萄酒の入つてゐる大瓶があつたがそれはフアロー一人のものではなく山に住んでゐた半人半馬等の共有物であつた。こは酒の神パツカスの賜物であつたがハークリーズがフアローの洞を來訪するまでは開くなどパツカスがフアローに告げた。今はハークリーズが來たのでフアローは他の半人半馬等に相談せないでも葡萄酒の瓶を開いてもよいと思つたが、半人半馬等は至つて粗暴な種族であつたので酒氣が森の隅々

まで満つるほど強い酒の香を嗅ぐと岩の松や枝や火把や斧を持つてフアローの洞に闖入した。ハークリーズを見て何者であるのか何故ここに來てゐたのかも知らずに突然撃つて掛つた。

ハークリーズは矢筒に澤山毒矢を挿してゐたので自から護らんが爲め餘儀なくこの矢を用ゐて半人半馬等を追ひ退けることが出來たが、半人半馬等が去つた後惡意にしてゐる半人半馬のフアローが此矢を一本拾つて珍らしげに見てゐるうちに手から滑つて足の甲に落ちた。その傷が毒蛇に咬まれたほど害をなして忽ちフアローは死んだ。茲に初めてハイドラの毒に矢を漬けたのをハークリーズは後悔した。

この後でハークリーズは山に登つてエリマンサスの野猪を捕へて生きたまま肩に引つ掛けてマイシネ市に戻つて來た。

エーリスシアス王は見張つてゐたがハークリーズは野猪を肩に掛けて野原を道つて來るのを見て酷く怖れて宮殿の内に駆け込んで隠れた、宮殿の扉の内側に蓋のあ

(希臘神話)

る大きな青銅の壺があつた。で王は周章してその中に飛び込んで頭の上に蓋を引き下した。

(希臘神話)

だが王の動作は急速でなかつたのでその折既にハークリーズは王宮に來て王が青銅の壺の蓋を締めてゐるところをちらと見認めた。けれどもハークリーズは見ぬ風して傍に立つてゐた數名の貴族に向ひ野猪を入れて置くにはこの青銅の壺が安全だと眞面目に注意して素早く蓋を揚げて野猪をその中に突込んだ。これがエーリスシアス王の最後とならうと思はれたが王は中々この奇怪しき同囚から害を受けなかつた同囚の野猪は王と同様に怖れて蹲つてゐた。

第三回の勢役の結末は斯んなであつた。

その六。 第四回の勢役。

月光の女神ダイアナの鹿を生擒ること。

ユーリスシアス王は青銅の壺から出て来て再び御座に就いた上、ハークリーズに更に難題を課せんと思ひ運らした。

アーケーデアの境にある大きな森の内に頗る疾足の鹿が一頭徘徊してゐた。この鹿はその地方の獵師を魅すことが度々であつたが、これまで實際この鹿を見たものが極めて稀れなので大抵の人は唯獵師の口草に上るまでのこととそんなものが居やうとは思はなかつた。ユーリスシアス王とてもその通りで矢張り疑つてゐた。もし獵師等の言ふことが信せられるものとしたなら、此の鹿には黄金の角と真鍮の蹄があつてその跳躍する力は驚くべきものであつてどれほど長い距離を獵犬等に追はれても毫も疲れるやうな様子になかつた。大抵はいつもダイアナ女神の殿堂の階段の邊りで嫩芽を咬んでゐたのでこの鹿は女神の保護を愛けてゐるものと人々は信じてゐた。

ユーリスシアス王は第四回の勞役として此の鹿を生擒つて戻れとハークリーズに

(希臘神話)

命じた。

斯くてハークリーズはアーケーデアの森に行つて下崩の草木のうちに身を潜めてダイアナの殿堂に近き小路小路を見張つてゐた。退屈な見張であつた。蚊が刺した光つた眼の蜥蜴が脚に這い上つた一羽の鳥が来て殿堂の蔭で啼いた。遂に黄金の角のある鹿が見えたので長く見張つてゐた詮があつた。ハークリーズは今まで斯んな美しい動物を見たことがなかつた。眼は大きくて柔和であつて黄金の角は美事な冠のやうに見えた。

ハークリーズは此の逃げ易い動物を一旦見逃したら又と見ることが出来ないものと知つたので目に附くや否や隠れ場所から躍り出して追つかけた。

鹿は森を過ぎ丘陵に登り河を渡りてアーケーデアの境を越えたが尙疲れずに前へ進んだがハークリーズはこれに接近しながらその跡を追ふた。鹿はこれまで斯んなに忍耐のある敵に追はれたことはなかつた。鹿はハークリーズに追はれながらズン

(希臘神話)

ズン前へ行つた到頭一年間も獵を續けられたので漸く疲れた様子が覚えて来た。
ハークリーズは殆んど歐羅巴の全部に亘り大圏を描いて追ふたので今は再びダイ
アナの殿堂に戻つて来た。鹿は疲れて喘ぎながら殿堂に走り込んだ。ハークリーズ
はその跡を追つてダイアナの聖地に入つてなりと鹿を捕へやうとしたが折しも月が
淡黒い雲の間からさし出でたので仰いて見れば不圖ダイアナ女神が自分の前に立つ
てゐた。女神の姿は丈高くあつて冠は新月のやうであつた。女神の脚下には鹿が
戦慄へながら伏してゐた。女神はハークリーズに向ひ「汝はこの鹿に手を着まいぞ
こは吾がものなり、歸つてユーリスシアス王に唯ありし事の次第を告げよ王は汝が
第四回の勞役を成し果せたものと看做すべし」と宣ふた。

その七。 第五回の勞役。

スチムフェーリア谷の群鳥

(希臘神話)

を果絶すること。

(希臘神話)

ユーリスシアス王今はハークリーズを追つて、スチムフェーリア谷の群鳥を追ひ
捕はせた。

スチムフェーリアスの谷は怪鳥の非常な群に惱まされることが度々あつて收穫や
獸群に大害を受けたこの鳥群は羊や牝牛を殺してその死體を食ふのは容易いこと
であつたからである。その上子供を奪ひ去ることもあつた。此の鳥には尖つた鐵の爪
と鐵のやうに羽莖の尖端の鋭い羽根があつてこれを敵に投げかける力があることは
獾に似てゐるが言ふまでもなくこの鳥群の害をなすこと獾よりは千倍も甚しい
のである自由に空を翔け廻つて上から羽根を投げ出すからである。その巢はこん
りと茂つた森の内にあつてその森の真中には一ツの沼があつた。
弓矢や棍棒や鎗で斯んな鳥獸と闘ふの無用なのを知つてハークリーズは別に工夫
を廻らし静に沼の縁に行つて頭の上に青銅の楯を翳して鳥の羽根を防ぎながら大き